久　井　遺　跡

――送電用鉄塔建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書――

1993年3月

長野県飯田市教育委員会

久井遺跡（ひさいせき）

——送電用鉄塔建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——

１９９３年３月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市松尾地区は古くから栄えた場所であり，数多くの遺跡や文化財が現在まで残っているところです。

今回の発掘調査を実施した久井地区は，松尾地区の中央やや北よりに位置しています。民間の開発に伴う発掘調査で小規模ではありましたが，この地区で発掘調査が実施されるのははじめてということで，どのようなものが発見されるのかの興味ももたれました。

発掘調査は市教育委員会が実施し，弥生時代の方形周溝墓，古墳時代の住居址及び奈良もしくは平安時代と見られる掘立柱建物址が確認できました。特にこの建物址はその規模からみても通常の建物のものではないと判断されました。

内容については，本文中に記した通りであり，今後の研究に供されることを期待しております。

本調査の終了と同時に，遺跡の一部は消滅してしまったことになります。私たちを豊かにする開発事業とそれによって失われる遺跡の保護という両者の立場は相入れないものがあります。両者の矛盾のなかで文化財保護に携わる教育委員会としては，文化財保護法を遵守しながら，諸開発との調整を図るべくそれぞれの対応に苦慮する今日といえます。本書を通じて，文化財保護の本旨を多くの方々にご理解いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが，調査にあたり文化財保護の本旨に深いご理解を賜った中部電力株式会社の皆様と厳寒のなかでの発掘作業や細かい整理作業にご協力いただきました作業員の皆様に心より厚く御礼申し上げ，刊行の言葉といたします。

平成５年３月31日

飯田市教育委員会教育長　小　林　恭之介

例　　言

1．本書は，中部電力株式会社による送電線用鉄塔建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地久井遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は中部電力株式会社の委託を受け，飯田市教育委員会が実施した。

3．発掘調査は平成３年12月９日から12月21日まで実施した。整理作業及び報告書の作成作業は平成４年度に実施した。

4．発掘調査及び整理作業では，遺跡名の略号をＨＳＩとした。

5．本書の記載順は時代ごと記述した。記述順序は遺構ごととした。

6．本書に記載した標高の単位はｍである。

7．遺構写真測量作業は㈱ジャスティックに委託して実施した。

8．本書の記載は，遺構図を本文に併せて挿図とし，遺物及び写真図版は本文末に一括した。

9．本書は吉川豊が執筆し，一部小林正春が加筆・訂正を行った。

10．本書の編集は，調査員全員での協議により行い，小林正春が総括した。

11．本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し，飯田市考古資料館に保管してある。

本 文 目 次

序
例言
目次
Ⅰ 経 過
1．発掘に至るまでの経過 …… 1
2．試掘調査の経過 …… 1
3．発掘調査の経過 …… 1
4．整理作業の経過 …… 2
5．調査組織 …… 2
1）調査団 …… 2
2）事務局 …… 2
Ⅱ 遺跡の環境
1．自然環境 …… 3
2．歴史環境と周辺遺跡 …… 3
Ⅲ 調査の結果
1．縄文時代 …… 9
1）遺構外出土遺物 …… 9
2．弥生時代 …… 9
1）方形周溝墓1 …… 9
2）遺構外出土遺物 …… 9
3．古墳時代 …… 11
1）竪穴式住居址 …… 11
1号住居址
2号住居址
2）土 坑 …… 14
土坑1
3）遺構外出土遺物 …… 14
4．奈良・平安時代 …… 15
1）掘立柱建物址 …… 15
掘立柱建物址1
掘立柱建物址2

2）遺構外出土遺物 …… 16
5．時期不明・遺構 …… 16
1）溝　址 …… 16
溝址1
溝址2
2）柱穴群 …… 16
3）遺構外出土遺物 …… 17
Ⅳ　まとめ …… 21
Ⅴ　引用参考文献 …… 24

挿　図　目　次

挿図1　調査遺跡および周辺遺跡位置図 …… 4
挿図2　調査位置および周辺地図 …… 5
挿図3　遺構全体図 …… 8
挿図4　方形周溝墓1 …… 10
挿図5　1号住居址 …… 12
挿図6　2号住居址 …… 13
挿図7　土坑1 …… 15
挿図8　掘立柱建物址1・2 …… 18
挿図9　溝址1・2 …… 19
挿図10　柱穴平面図 …… 20

図　版　目　次

第1図　遺構外出土遺物（縄文時代） …… 27
第2図　遺構外出土遺物（縄文・弥生時代） …… 28
第3図　1号，2号住居址出土遺物 …… 29
第4図　2号住居址出土遺物 …… 30
第5図　2号住居址出土遺物 …… 31
第6図　2号住居址出土および遺構外出土遺物（古墳時代） …… 32
第7図　遺構外出土遺物（奈良・平安時代，中世以降）および玉類，金属器類 …… 33

写真図版目次

図版１　発掘調査区全景 …… 37
図版２　方形周溝墓１・土坑１ …… 38
図版３　１号住居址 …… 39
図版４　２号住居址 …… 40
図版５　掘立柱建物址１・２ …… 41
図版６　縄文時代遺物 …… 42
図版７　弥生時代遺物 …… 43
図版８　古墳時代遺物　その１ …… 44
図版９　古墳時代遺物　その２ …… 45
図版10　古墳時代遺物　その３ …… 46
図版11　奈良・平安時代遺物　その１ …… 47
図版12　奈良・平安時代遺物　その２，中世以降遺物 …… 48
図版13　作業風景 …… 49

Ⅰ 経　　過

1．発掘に至るまでの経過

中部電力株式会社は，電力の安定供給をめざし，飯田市松尾地区に変電所の新設あるいは改修を実施している。それに伴い送電用鉄塔の建設計画が示された。計画のうち松尾久井地区での建設予定地は埋蔵文化財包蔵地「久井遺跡」として登録されているため，現地協議を実施することになった。

協議は，長野県教育委員会文化課の担当指導主事，飯田市教育委員会社会教育課職員および開発主体者である中部電力の担当者の間で実施した。その結果，用地内の試掘を実施し地下の様子を調べ，その結果を基に再度協議することとなった。

2．試掘調査の経過

用地内の果樹が片付くのを待って，10月21日から作業員を入れて実施した。場所的に重機が使用できないところであり，すべて人力で行うこととなった。最初はトレンチ調査を計画，着手したが，地山までの深さが予想以上だったため，２ｍ四方のグリッドによる調査に切り替えた。２ｍ程度掘ってやっと基盤である粘土層に到達した。覆土からは遺物の出土があり，一部住居址の床らしい三和土も確認できた。

その結果に基づき再度協議を実施した。協議の結果，ＪＲ用地の一部を除く鉄塔敷全体の発掘調査を行い，遺跡の記録保存を行うことになった。

3．発掘調査の経過

試掘の状況から調査面積が少ない割に基盤まで２ｍの深さがあり，その排土量は膨大な量になると判断され，土を置く場所が確保できなければ調査が実施できないため，隣地の使用許可を貰い，重機により表土剥ぎを実施した。

表土剥ぎ作業終了後人力による遺構検出と遺構掘り下げを実施した。遺構の実測は写真測量により実施した。

現地での作業が完了したのは12月21日であった。

4．整理作業の経過

平成4年4月からの遺物の洗い，注記，復元作業および図面，写真類の諸整理作業を実施した。遺物の出土量の割に完形になるものは10点前後と少なかった。遺物の実測は復元の終了を待って行い，それに平行して遺構図のトレースも実施した。原稿執筆，図版組みを行い報告書の刊行となった。

5．調査組織

1）調　査　団

調査担当者　小林　正春

調　査　員　佐々木嘉和　佐合　英治　吉川　　豊　馬場　保之　渋谷恵美子　福沢　好晃

発掘作業員　今村　春一　北村　重実　木下喜代恵　菅沼すみ子　菅沼　ゆみ　原田四郎八
正木実恵子　三石　久雄　森　　章　柳沢　謙二　吉川　正実

整理作業員　金井　照子　金子　裕子　唐沢さかえ　木下　早苗　木下　玲子　小平不二子
小林　千枝　斎藤　徳子　田中　恵子　丹羽　由美　林　勢紀子　牧内喜久子
松本　恭子　森　　信子　吉沢まつ美

2）事　務　局

飯田市教育委員会

安野　　節　飯田市教育委員会社会教育課長
中井　洋一　飯田市教育委員会社会教育課文化係長　平成3年度
原田　吉樹　飯田市教育委員会社会教育課文化係長　平成4年度
小林　正春　飯田市教育委員会社会教育課文化係
吉川　　豊　飯田市教育委員会社会教育課文化係
馬場　保之　飯田市教育委員会社会教育課文化係
渋谷恵美子　飯田市教育委員会社会教育課文化係
福沢　好晃　飯田市教育委員会社会教育課文化係　　平成4年度
篠田　　恵　飯田市教育委員会社会教育課社会教育係

Ⅱ　遺跡の環境

1．自然環境

飯田市松尾地区は，飯田市街地から南西に約２～５kmに位置し，飯田市全域から見ればほぼ中央部にあたる。

東は天竜川をはさみ下久堅地区に，北は松川で下伊那郡上郷町（平成５年７月１日合併予定）と境を接する。南は毛賀沢をはさみ竜丘地区となり，西は河岸段丘上で鼎地区と接する。

伊那谷の基本的な地形は，天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向への断層段丘地形を特徴としている。

松尾地区はこの天竜川が東端を南流し，その氾濫源を含め５～６の段丘面で形成されている。それらは，高位と低位とに大別でき，その境は鳩ケ峯八幡宮の社叢を中心とした段丘崖である。この段丘崖も小河川によりいくつかにわかれ，それぞれに名前が付いている。北から上の城・茶柄山，妙見山，八幡山，代田山，御射山原，松尾城跡と南へつながっている。

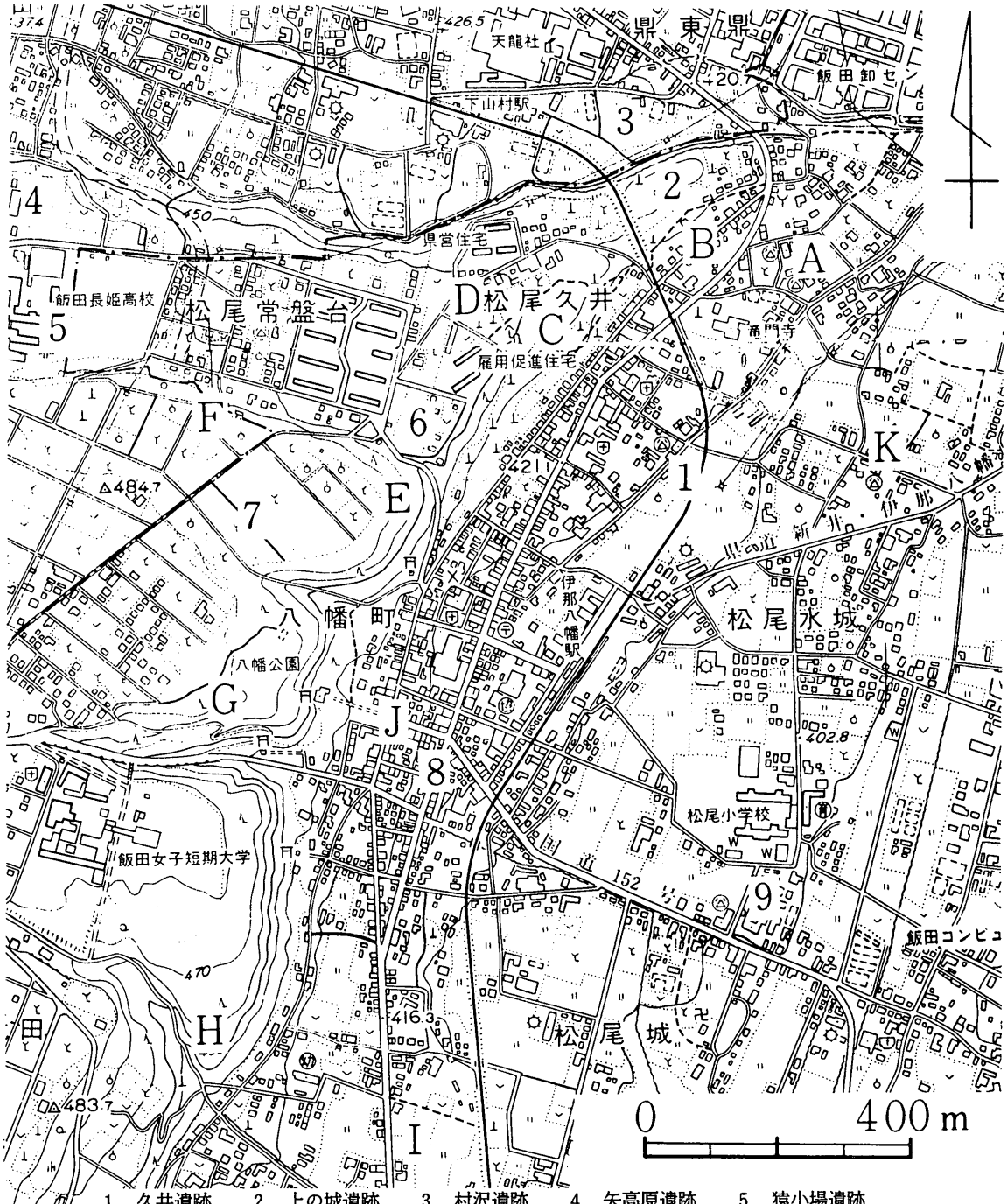
高位段丘の標高は480m前後でローム層に覆われた台地である。低位の段丘は前述の段丘崖下から天竜川までの間の松尾地区の大半である。この中に５～６面の小段丘があり，それぞれ２～５ｍの比高差がある。標高は380m～430m程度である。それぞれの段丘面の広さは一様ではないがいずれも南北方向の段丘崖が確認でき，段丘崖真下には湿地が確認できる場合が多い。しかし，大段丘崖からの小河川により小扇状地が形成されている場所があり，その部分では段丘崖の把握は困難となっている。また，これらの河川や段丘崖の湧き水により，低位段丘は全体に水利は良い。

気候面でみれば，伊那谷は比較的温和であり，松尾地区は飯田市の中でもさらに温暖である。平均気温は，13℃に近く，降水量も年間１,600mm程度である。低位段丘は，後ろに段丘崖を背負っているため，冬の北風から守られる格好になっていることも要因のひとつにあげられる。

久井遺跡は低位段丘の上段に位置しており，幅は約150m長さ700mと南北に細長く伸びている。今回の調査地点は，ＪＲ飯田線伊那八幡駅の北東方向にあたる。また，段丘崖の真下に近い場所であり，地表から遺構検出面までは２ｍほどある。覆土の大半は黒色の砂であった。これは，上位段丘から水流により運ばれたもので，段丘崖真下に堆積したものと見られる。

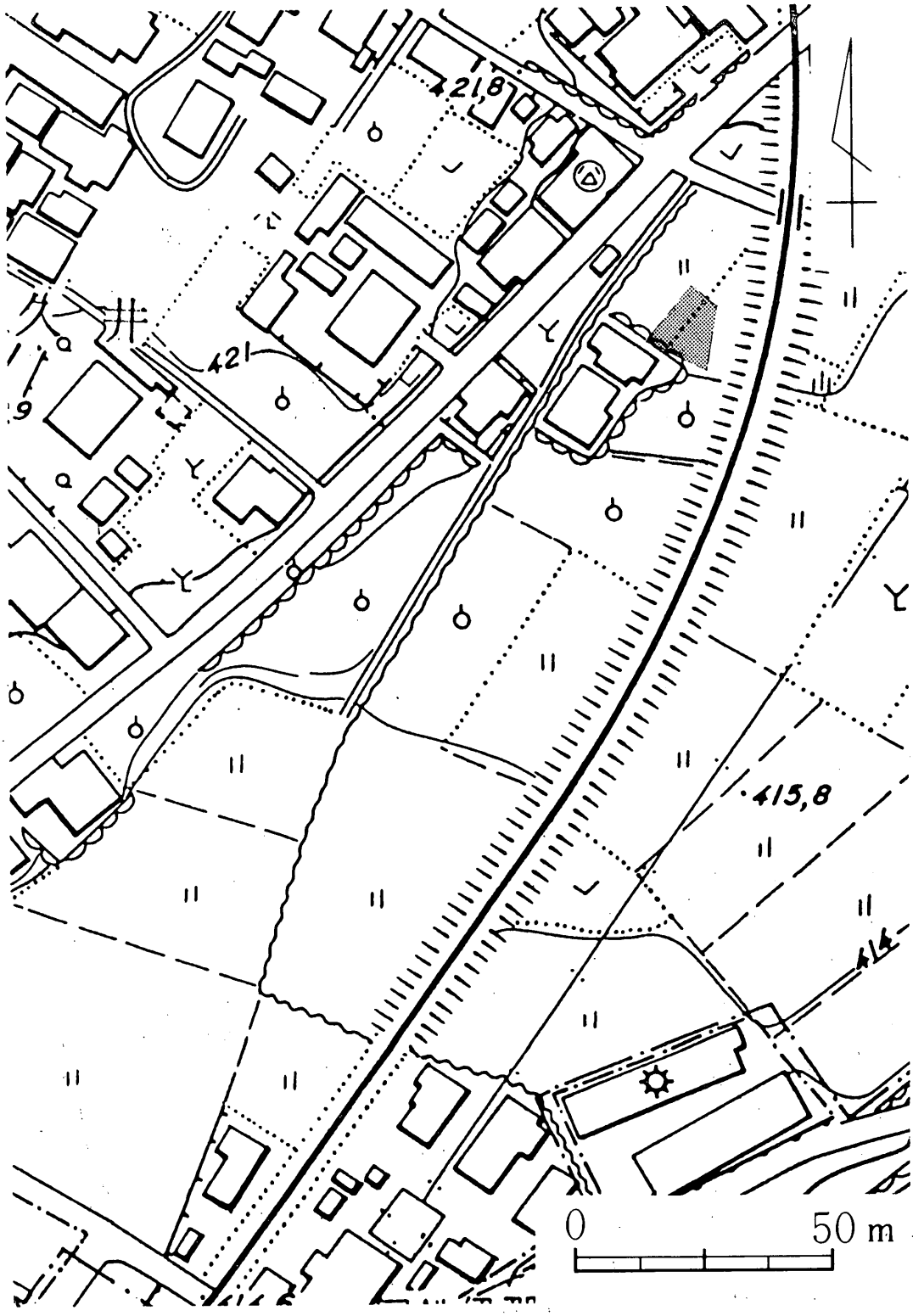
2．歴史環境と周辺遺跡（挿図１・２）

松尾地区の遺跡を概観すると，天竜川氾濫源及び段丘崖を除いてほぼ全域が包蔵地である。松尾地区での遺跡発掘調査は近年になって増大してきた。その最初は昭和43年１月と昭和46年３



1．久井遺跡　2．上の城遺跡　3．村沢遺跡　4．矢高原遺跡　5．猿小場遺跡
6．北の原遺跡　7．八幡原遺跡　8．代田遺跡　9．城遺跡
A．天神塚古墳　B．おかん塚古墳　C．茶柄山古墳群　D．御射山獅子塚　E．妙見山古墳
F．物見塚古墳　G．八幡山古墳　H．代田山２号墳　I．代田山獅子塚古墳　J．八幡町古墳
K．水佐代獅子塚

挿図１　調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図２　調査位置及び周辺地図

月に実施された『寺所遺跡』の学術調査である。昭和46年度には国の補助事業として『妙前大塚（3号）古墳』の調査が実施された。昭和49・50年には天竜川護岸工事と国道152号付替に伴う『清水遺跡』の調査が，続いて工場建設に先立つ『南ノ原遺跡』（昭和50年）・『毛賀御射山遺跡』（昭和53年）の調査を行っている。また，都市計画公園整備に伴う『松尾城跡』の調査は昭和54・55年に実施，昭和63年には地区の集会施設建設に先立つ『八幡町古墳』の調査が行われている。平成元年に松尾公民館移転新築に伴う『城遺跡』，さらに平成2年には雇用促進住宅の建設に伴う『清水遺跡』の発掘調査が行われている。上溝公民館新築時に周溝と盛土の一部を調査した『上溝天神塚古墳』では，平成3年に石室内の清掃調査を実施している。さらに高位段丘ではあるが，一般国道153号飯田バイパス建設に伴い『八幡原遺跡』を調査したのが平成2年である。現在『北の原遺跡』・『茶柄山古墳群』の調査を実施している。

松尾地区の歴史を概観すれば，縄文時代以前の遺構は低位段丘では現在まで報告されていない。遺物は断片的な資料のみである。しかし，高位段丘である，八幡原遺跡，猿小場遺跡から旧石器時代の遺物の出土が報告されている。縄文時代前期の住居址と土坑も八幡原遺跡で確認された。縄文時代中期の遺構が猿小場遺跡にある。しかし，後期・晩期についてはいまだ報告がされていない。

弥生時代の遺跡は，中期前葉の標式土器となっている寺所式を出土したのが，低位段丘中でも下位に位置する寺所遺跡である。さらに後期の中島式土器が出土している遺跡として，低位段丘では城遺跡・清水遺跡があり，高位段丘では茶柄山遺跡がある。

古墳時代前期の集落址が確認された城遺跡・清水遺跡は弥生時代後期から連続した集落である。

古墳時代後期の集落址は，今回の久井遺跡が最初であり，それ以外には確認されていないが，現存する古墳の数から推察すればかなりの規模の集落が複数あったと考えるのが妥当である。

松尾地区に現存する古墳の数は，座光寺地区・竜丘地区と並んで数が多い地区である。松尾地区にある古墳の中で最も古いと見られる古墳は，代田山に現存する前方後方墳『狐塚古墳』であろう。また，調査した『妙前大塚』は円墳であるが，その墳頂から出土した「眉庇付冑」やその他鉄製品からみて，古い時期の古墳とされている。

松尾地区の最高位段丘にあたる箇所にある八幡山の中には帆立貝型古墳と見られる『八幡山古墳』が現存している。高位段丘の八幡原には，飯田市立病院建設に先立ち発掘調査した『物見塚古墳』（鼎地籍）と国道153号飯田バイパスの建設に先立ち発掘調査した『妙見山古墳』があった。八幡原の一段下になる北の原には，前方後円墳である『御射山獅子塚古墳』とその周辺に点在する『茶柄山古墳群』がある。低位段丘では，『天神塚古墳』・『おかん塚古墳』・『姫塚古墳』・『羽場獅子塚古墳』の前方後円墳を中心にした『上溝古墳群』，さらにその下位段丘面に位置するのが，『妙前古墳群』や『水佐代・城古墳群』である。その南側には，『代田・上毛賀古墳群』があり，さらにその下段には『下毛賀古墳群』というように松尾地区全域に古墳が見られる。

平安時代の遺構が確認できたのは猿小場遺跡である。この遺跡では25軒の住居址を調査し大規

模な集落址であることがわかっている。また，八幡原遺跡においても，住居址が確認されている。これらはいずれも高位段丘上に位置する遺跡である。低位段丘では清水遺跡において住居址や掘立柱建物址を確認している。掘立柱建物址は今回の久井遺跡でも確認された。中位の段丘上に点在する，毛賀御射山遺跡は，平安時代の布目瓦や瓦塔片が出土しており，古代寺院が存在した場所である。

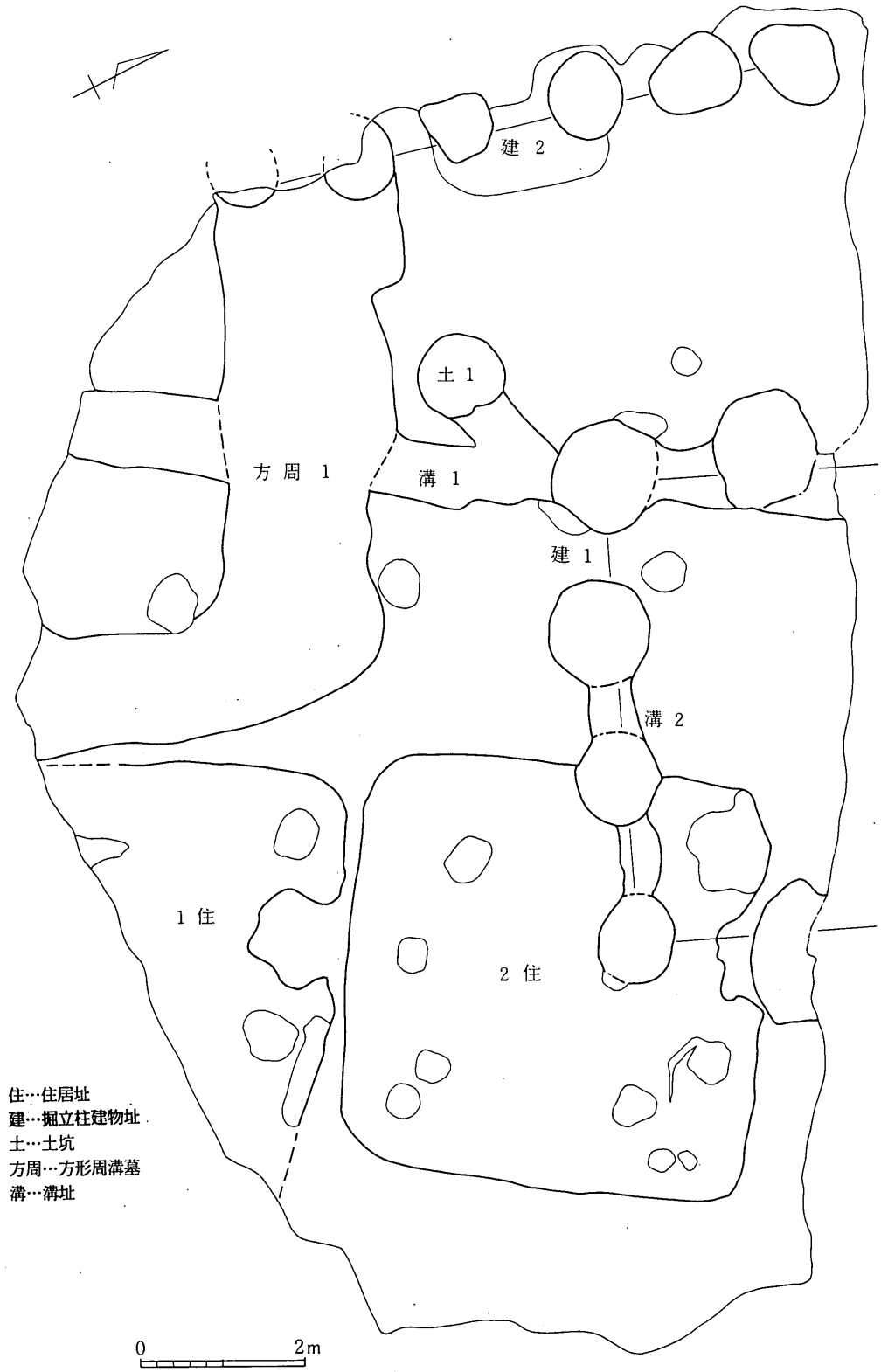
松尾城跡や南ノ原遺跡では，陶磁器や建物址が確認され，中世小笠原氏に関係するものと見られている。しかし，一般庶民に関する資料はほとんど報告がなく不明な点が多い。

松尾地区の南端にある松尾城跡は，信濃守護職である小笠原氏の居城であり，毛賀沢川を挟んで対峙する鈴岡城跡とともに，県の史跡に指定されている。さらに松尾地区の東端に「城」という地名が残っており，城跡あるいは居舘跡があったとも言われている。

松尾地区の中央にうっそうとした社叢に囲まれた鳩ケ嶺八幡宮がある。この神社は鎌倉時代の文献によりすでにその存在が明らかである。本尊として奉られている『誉田別尊坐像』は重要文化財に指定されている。

八幡町には旧街道が２本通っていた。そのうち一本が『秋葉街道』と呼ばれるもので，現在の国道152号である。この街道は武田信玄の信州侵略により整備されたものである。もう一本は『遠州街道』で，現在の国道151号である。この道は中馬道として江戸時代に発達した。この２本の街道の分岐点は鳩ケ嶺八幡宮の前であり，現在でも道標が立っており，交通の要所であることを示している。

松尾地区は歴史的にみれば，古代から近代にいたるまでの飯田下伊那地方の中心地のひとつに上げられよう。



挿図3　遺構全体図

Ⅲ　調査の結果

1．縄文時代

当該時代に該当する遺構は確認できなかった。

1）遺構外出土遺物（第1・2図）

土器としては，縄文時代中期が中心であるが，その数は少ない。1図1は隆帯と縄文を組み合わせた模様があり，深鉢の破片である。2も深鉢の破片と見られるが，縄文のみである。3，4は沈線により縄文が区切られている。5は口縁の一部である。

石器はほとんどが打製石斧である。6は厚手の硬砂岩製のもので，完形である。9・11・14・15は硬砂岩製であるが，一部欠損している。7・8・10・12・13は緑色岩製であり，使用による磨滅が認められる。

2図1・2は硬砂岩製の横刃形石器とみられるが，いずれも調整や使用痕がはっきりしない。3はやはり硬砂岩製で両端に抉りのある石錘である。

2．弥生時代

1）方形周溝墓

方形周溝墓1（挿図4，第2図）

調査区の南西部で検出した。試掘の時にすでになんらかの遺構の存在は確認していたが，グリッド調査のため全容が掴めなかった。表土を剥いだところ黒色の覆土をもつ溝が約9m続いていた。この溝は途中でほぼ直角に曲がっており，さらに用地外へのびているものとみられる。

幅は検出面で1.7m，底部では30cmを計る。深さは最も深い西端で95cm，最も浅い南端でも78cmとしっかり掘られ，壁は急角度に立ち上がっているため，断面形は逆台形になっている。形態から方形周溝墓の一部と判断したが，全体の規模や埋葬施設の位置は不明である。

遺物としては，2図4の櫛描波状文が何段かに描かれている甕の破片であり，それ以外にも同様の波状紋がある甕の破片（2図5）があり，弥生時代後期と見られる。

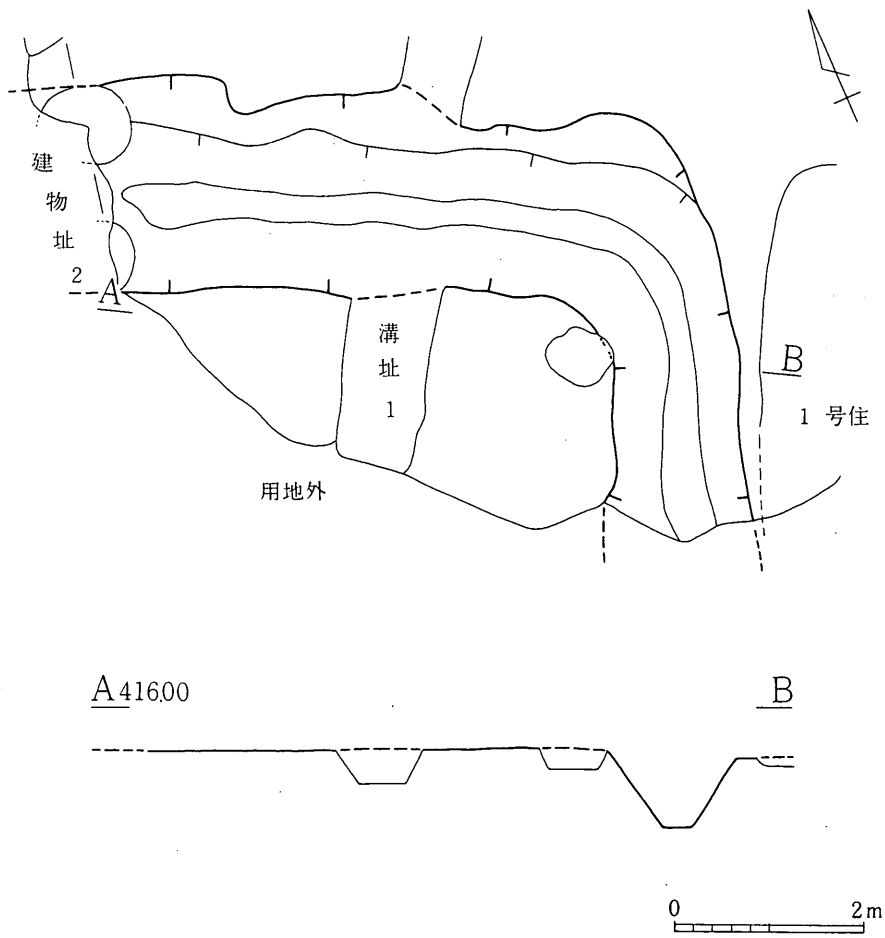
2）遺構外出土遺物（第2図）

方形周溝墓以外に当該時代の遺構はないためか，出土した遺物は少ない。

2図6は壺の脛部の破片と見られ，波状紋と横線紋が施されている。7は波状紋がある甕の破片で後期中島式の土器である。8は高坏の脚部の破片で丹塗りが施され，古墳時代前期の可能性

もある。

石器として出土した9は硬砂岩製の有肩扇状形石器で，基部が一部破損しているが，ほぼ完形品である。10はやはり硬砂岩製の打製石包丁である。約半分が欠損しているもので，中央に孔が穿けられ，そこから破損したものと見られる。



挿図4　方形周溝墓1

3．古墳時代

1）竪穴住居址

1号住居址（挿図5・第2，3，7図）

調査区の東南部で検出した，隅丸方形の竪穴式住居址と見られるが，壁が北隅を中心に10cm前後の浅い掘り込みとして確認できたのみで，その他の場所では確認できなかった。しかし，床面や柱穴等の状態から判断すればさらに用地外に拡がりがある。一辺4.8m程度の規模になるものと見られる。調査した範囲は，住居址の約半分である。

唯一残っている北壁の中央やや西よりに焼土がまとまって確認され，その付近から土師器が出土したことからこの部分をカマドとした。しかし，なんらかの削平を受けており，形態はまったくわからない。

周溝はカマドの東側の壁真下でのみ確認できた。長さ1.4m，幅0.3m，深さ8cmとごく浅い。床は比較的柔らかである。主柱穴は，北のコーナーで1つ確認したのみである。大きさは，60×80cmの楕円形であり，深さは40cmを測る。途中に陵があるが，急角度にしっかり掘られている。床面で確認した穴は，カマドの東側でやはり壁面に陵を持つ深さ20cmの不整楕円形のものがある。貯蔵穴と見られる。

遺物は3図1はP1から出土した完形の長胴の甕である。表面が多少荒れており，炭も付着しているが，縦方向へ篦磨きを施した痕跡が認められる。内側の脛部付近には篦削りの跡が残っている。2はカマド付近にあった甕である。長胴の甕と見られるがやや小型である。底部はさらに底がつくものと見られる。2図11はやはりカマド付近から出土した甑である。12・13も，長胴の甕と見られるが口縁部である。脛部から胴部にかけて篦削りの跡が残っている。

7図13は床面から出土した臘石製の臼玉がであり，さらに14は覆土から出土した鉄製品で錆を落としたところ鉈の刃先であることがわかった。

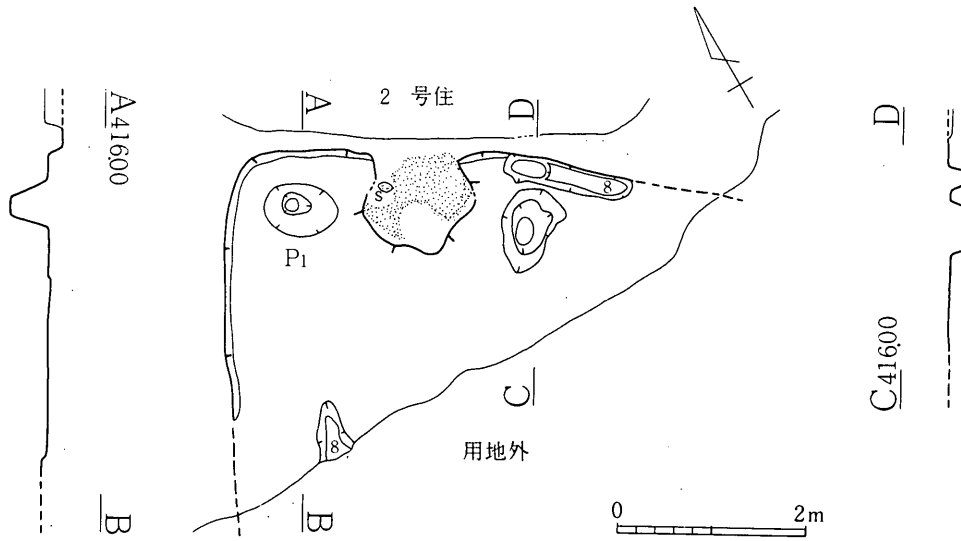
遺物から判断して，古墳時代後期の遺構である。

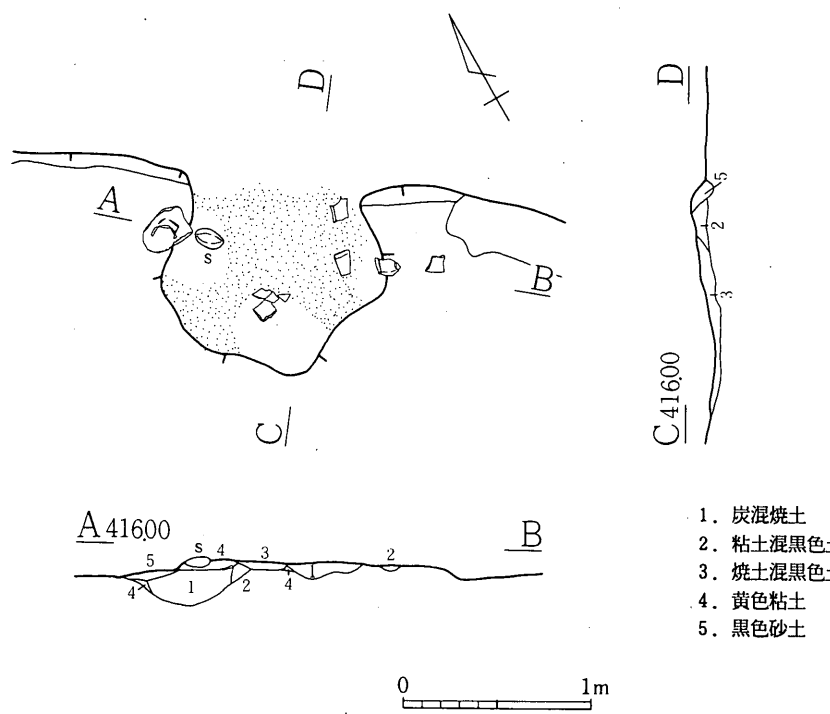
2号住居址（挿図6・第3，4，5，6図）

調査区の東側で検出し，完掘できた。一辺が4.8mの隅丸方形の竪穴式住居址である。建物址1の柱穴により北側ではカマドの一部と西側の壁が切られ，住居址の中央よりやや北よりの床面も切られている。また，建物址の柱穴をつなぐように溝2本が床面を切っている。

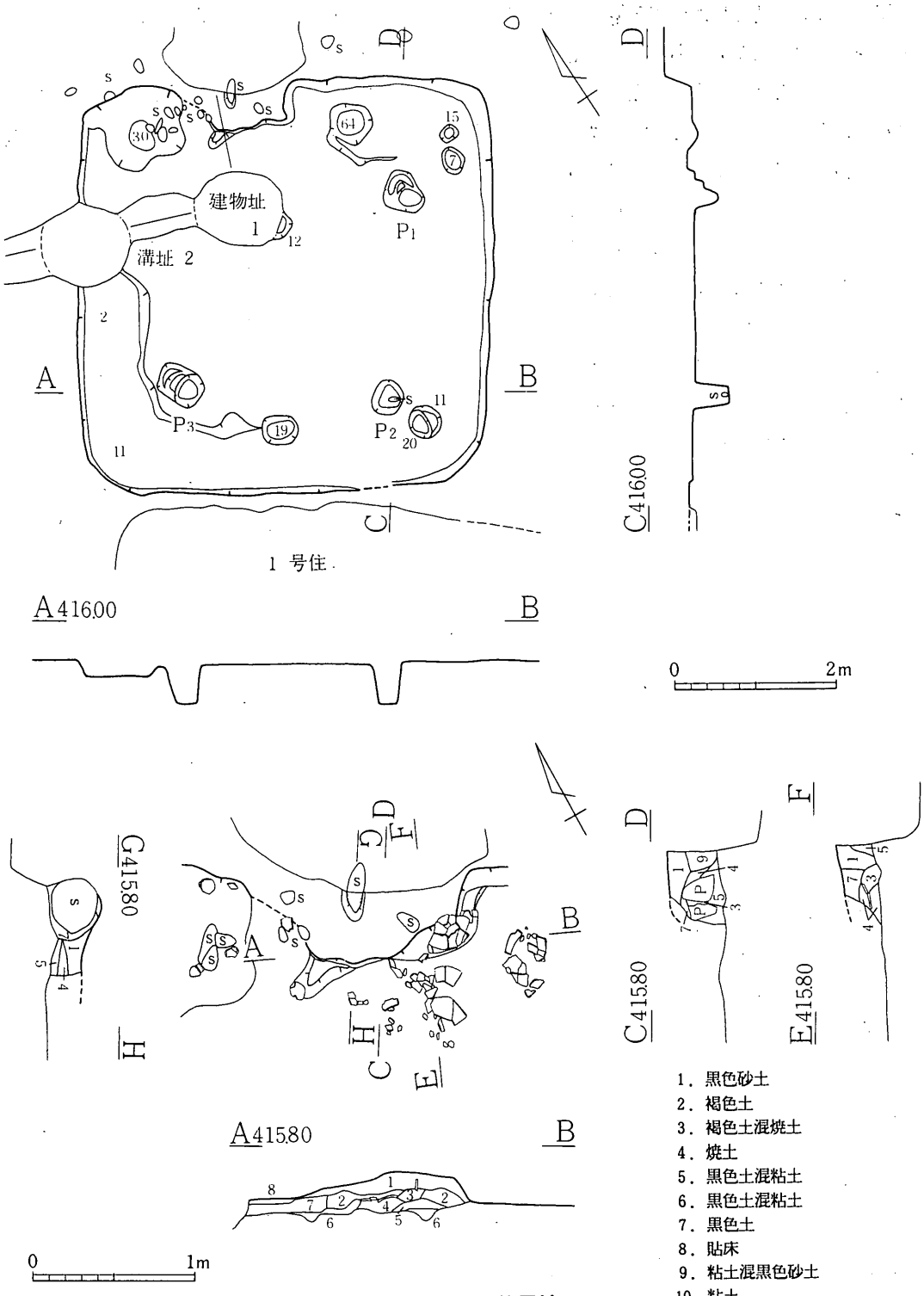
床は比較的柔らかい。西コーナー付近で幅80cm，深さ11cmの落ち込みが3mほど確認できたため，周溝とした。東コーナーも似た落ち込みがほんの少しではあるが，確認された。

主柱穴は4個と見られるが，北西の1つがわからず，3個（P1からP3）を確認した。いずれも深さは40cmで不整円形をしており，P1，P3の底部は段になっている。


2 号住
A
D
A416.00
C416.00
P1
s
8
C
B
用地外
0
2m


A
B
C
D
s
C416.00
A416.00
1. 炭混焼土
2. 粘土混黒色土
3. 焼土混黒色土
4. 黄色粘土
5. 黒色砂土
0
1m

挿図5　1号住居址



1．黒色砂土
2．褐色土
3．褐色土混焼土
4．焼土
5．黒色土混粘土
6．黒色土混粘土
7．黒色土
8．貼床
9．粘土混黒色砂土
10．粘土

挿図6　2号住居址

壁は比較的急角度に20cm程度堀り込まれているが，北側に比べると南側は浅い。これは検出面をやや下げ過ぎたためであろう。北壁やや西よりにカマドがある。カマドの西側，ちょうど北のコーナーにあたる部分に直径80cm，深さ30cmの貯蔵穴と見られる穴がある。床面にはいくつかの穴があるが，これらは主柱穴の横であったり真ん中であったりするところから間仕切り等住居内空間利用施設の痕跡の可能性がある。

カマドは建物址の柱穴に切られほとんど原形をとどめていない。しかし，立ち割りの結果，袖石を持つ石芯粘土カマドであることが確認できた。さらに，石のかわりに壊れた甑を使用していた。

遺物の出土は比較的多い。4図1は丸形の甕であり，ほぼ完形で出土した。5図2はこれよりやや小型であり，胴部下半分は欠損している。5図1は長胴の甕であるが，かなり歪んでいる。3図3もやや小型の甕である。3図4はさらに小型の甕であり，底部には台が着いていたものと見られる。5図3は甕の底部である。底部のみの出土であったが，葉状痕がはっきり見える。4図2はカキメの残る甑である。これは，前述したカマドから出土したものである。

5図4から9までは土師器の坏である。4・5は半円形をした坏であり，4は内側を黒色に塗ってある。また，7・8はやや外へ開く口縁を持つ坏で内側は黒色に塗られている。6は底部が丸く底部から段を持って立ち上がるものである。その他，10は高坏の坏部であり，稜をもっている。さらに図にはできなかったが三角形の透かしを持つ高坏もあった。須恵器としては，6図1の拓本で示した壺の口縁がある。その他2つの坏は底部のみで，3・4の蓋も破片である。量的には土師器に比べてかなり少ない。

溝2に切られている箇所から出土した6図5は紡錘車である。また7図15は刀子であり，木質が残っている。しかし，両者ともこの住居址に関係するものとは断定できない。

この住居址は遺物から判断して古墳時代後期の遺構である。

2）土　坑

土坑1（挿図7）

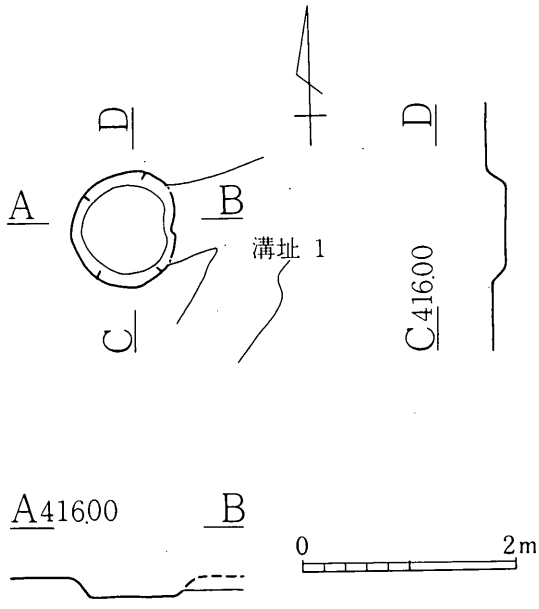
調査区のほぼ中央よりやや西寄りで検出した，直径約1mの円形の土坑である。南側の壁は溝1に切られており，ほとんど残っていない。深さは17cmで，底部はほぼ平坦である。壁は比較的ゆるやかに立上がっている。

暗褐色の覆土中からは，篦磨き痕のある土師器の甕と内黒の坏が出土しているが，図化できなかった。

出土遺物から古墳時代後期の遺構である。

3）遺構外出土遺物（第6図）

試掘時に検出面近くで出土している甕がある。6図6・7がそれである。7には口縁部に篦削りの調整痕が残っている。



挿図7　土坑1

4．奈良・平安時代

1）掘立柱建物址

掘立柱建物址1（挿図8）

調査区の北側で「コ」の字形に並んだ6個の柱穴を検出した。柱穴の東側の3個は2号住居址を切っている。また，南側の3個は溝2によってつながっている。さらに，西側の2個は溝1によりつながった状態である。

柱穴の大きさはいずれも直径1.4m程度の円形である。深さもほぼ70〜80cmと一定である。壁もほぼ垂直にしっかりと掘られている。底部は平坦であり，西コーナーのものと東の用地境にかかるものは中段がある。また，いずれの穴も覆土中に多数の石が混じっていた。

遺物の出土はなく時代決定は遺構の切り合い関係と遺構の状況から奈良もしくは平安時代の建物と判断できる。

掘立柱建物址2（挿図8）

調査区西側の用地境で一列に並んだ柱穴を4個検出し，掘り下げた。さらに南側の用地壁の断面に2個の柱穴を確認した。いずれも方形周溝墓の溝にかかっていたが掘ることはできなかったが，結局確認された柱穴は計6個になった。大きさはいずれも直径1mの楕円形である。掘立柱建物址1の柱穴に比べると深さはかなり浅いが，検出面の把握状況によるものである。一番深い北端の柱穴で40cmである。しかし，底部は平坦であり，壁もほぼ垂直に近い角度で立ち上がっているなど，形態は掘立柱建物址1と似ている。北端の柱穴は2段になっており，北から2番目の

柱穴には人頭大の石が3個入っていた。

遺物としては，須恵器の蓋の破片が出土したのみであるが，小破片で図化できなかった。時代的には掘立柱建物址1と同様，奈良もしくは平安時代と判断できる。

2）遺構外出土遺物（第7図）

この時期の遺物と見られるものは，土師器の甕の底部や坏等の破片がある。また，7図5の灰釉の長脛壺は口縁のみの出土であるが，轆轤により整形されている。6は同じく灰釉陶器の小型の壺と見られる。10は須恵器の胴部と底部がごくわずか出土したもので器形の判断はできないが，おそらく壺であろう。胴部にはタタキの跡がある。9は須恵器の坏であり，底部には糸切りの跡が見られる。その他にも坏の底部があり，この時代のものと見られる。

5．時期不明遺構

1）溝　址

溝址1（挿図9）

調査区の中央やや西より，土坑1の東側で検出した溝である。北東から南西に延び調査区を縦断している。掘立柱建物址1の西側の柱穴を切り，そこで2本に別れる。1本は土坑1の壁まで伸び，もう1本は方形周溝墓1の壁を切って用地外に延びている。長さは5m，幅はずっと一定で0.5mである。深さは北東の端が10cmであるのに対し，2本に別れる部分では20cmと多少深くなる。さらに，南西の用地境では30cmになる。

全容がつかめないため，性格等は不明であるが，なんらかの区画に用いた溝の可能性もある。

また，出土遺物はなく，遺構の切り合いから平安時代以降であるが，特定はできなかった。

溝址2（挿図9）

溝1に直交する方向で，掘立柱建物址1の南側の柱穴3個をつなぐ格好で検出した。したがって，東西の方向であり，始点も終点も掘立柱建物址1の柱穴となっているため，確認できた部分での長さは2.7m，幅が0.6mである。深さは2号住居址の床面からでも30cmと深く，検出面からは40cmもある。壁は急角度に立ち上がっており，断面形で逆台形になっている。

出土遺物としては，住居址内の部分から紡錘車と刀子が出土している。どちらのものか判断できなかったが，2号住居址の遺物として取り上げた。

この溝自体の性格や，時期は不明である。

2）柱穴群（挿図10）

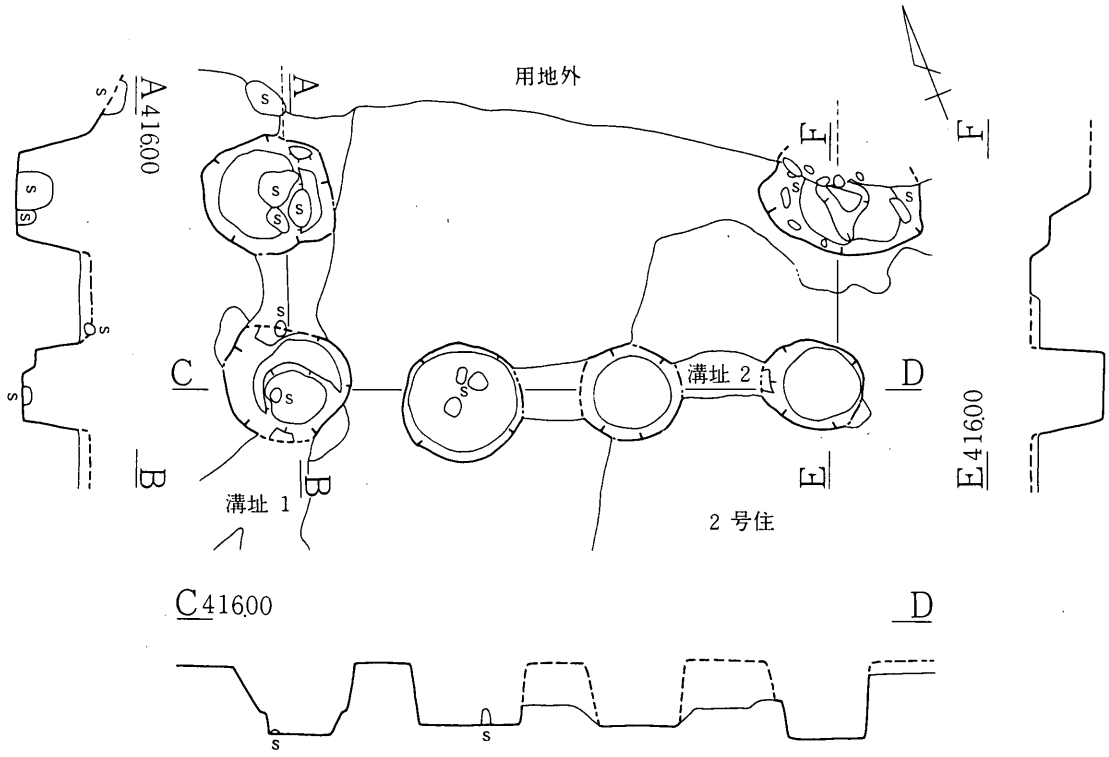
溝1の東側に直径40cmの円形の柱穴が3個並んでいる。深さは20cm程度で比較的浅いが間隔もほぼ3mと一定である。溝がなんらかの区画とすれば，この柱穴もそれに付随した柵等の遺構であろう。

3）遺構外出土遺物（第7図）

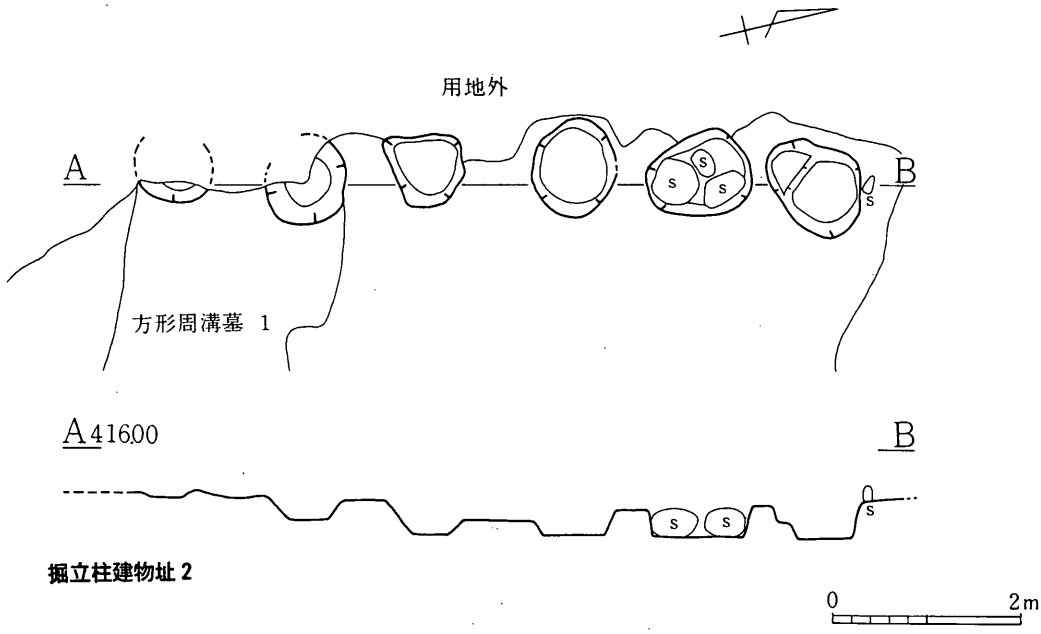
遺物の内で中世に属するものは7図11の山茶碗がある。高台に籾殻の跡が付いている。その地図化できなかったが大平鉢・おろし皿・摺鉢を初め陶器類の小破片が出土した。磁器類としては青磁の碗が一点出土したのみである。また，石器として出土しているのは，7図12の砥石である。破片が一部出土したのみであるが，かなり使用されていることがわかる。

近世・近代に属する陶器片・磁器片が多数出土しているが，小破片であるため図化できなかった。染め付けの茶碗や鉄釉の急須などもあった。

鉄製品として7図16の釘がある。この釘は四角のものであり，近世に属する遺物である。

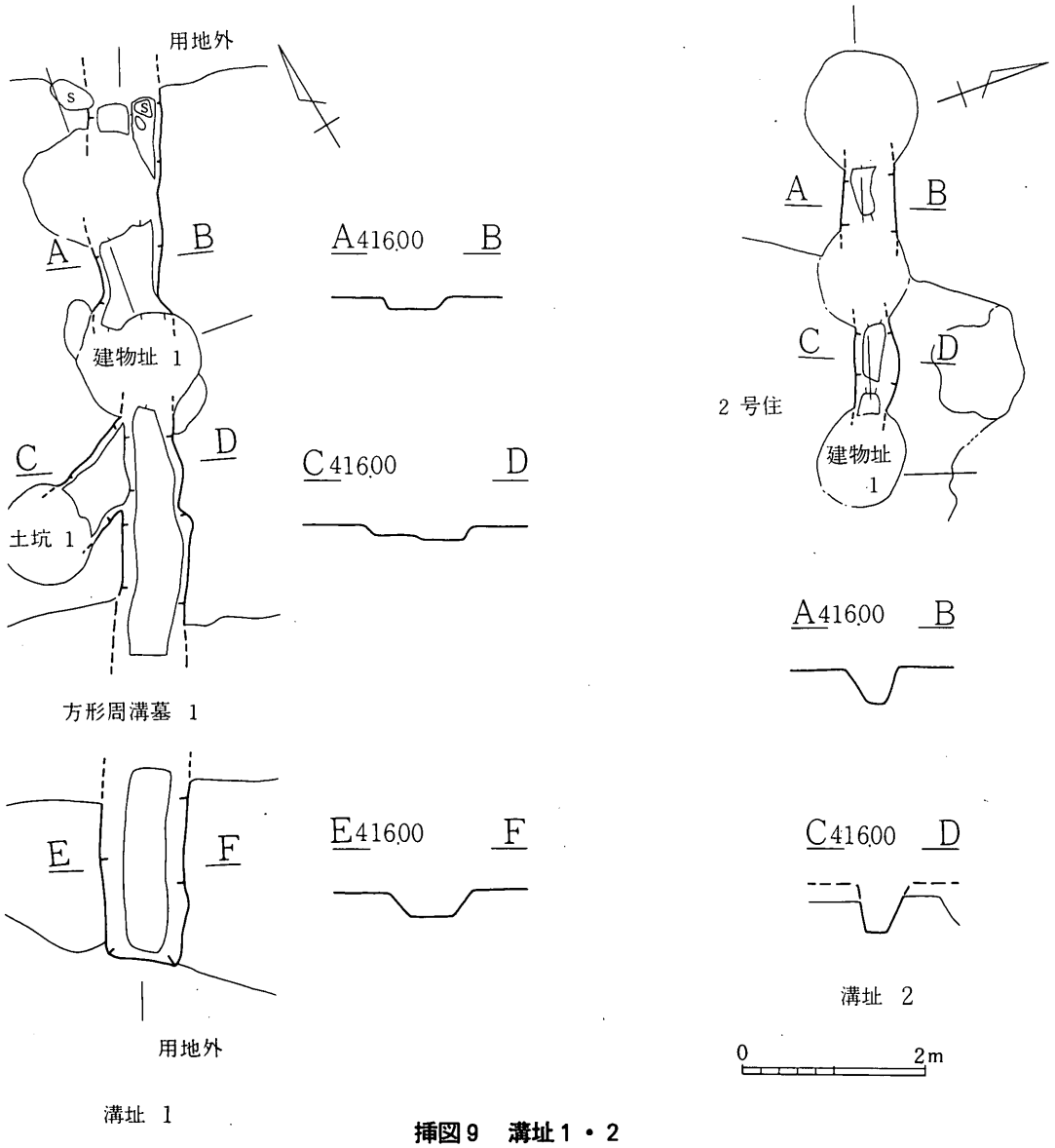


掘立柱建物址 1

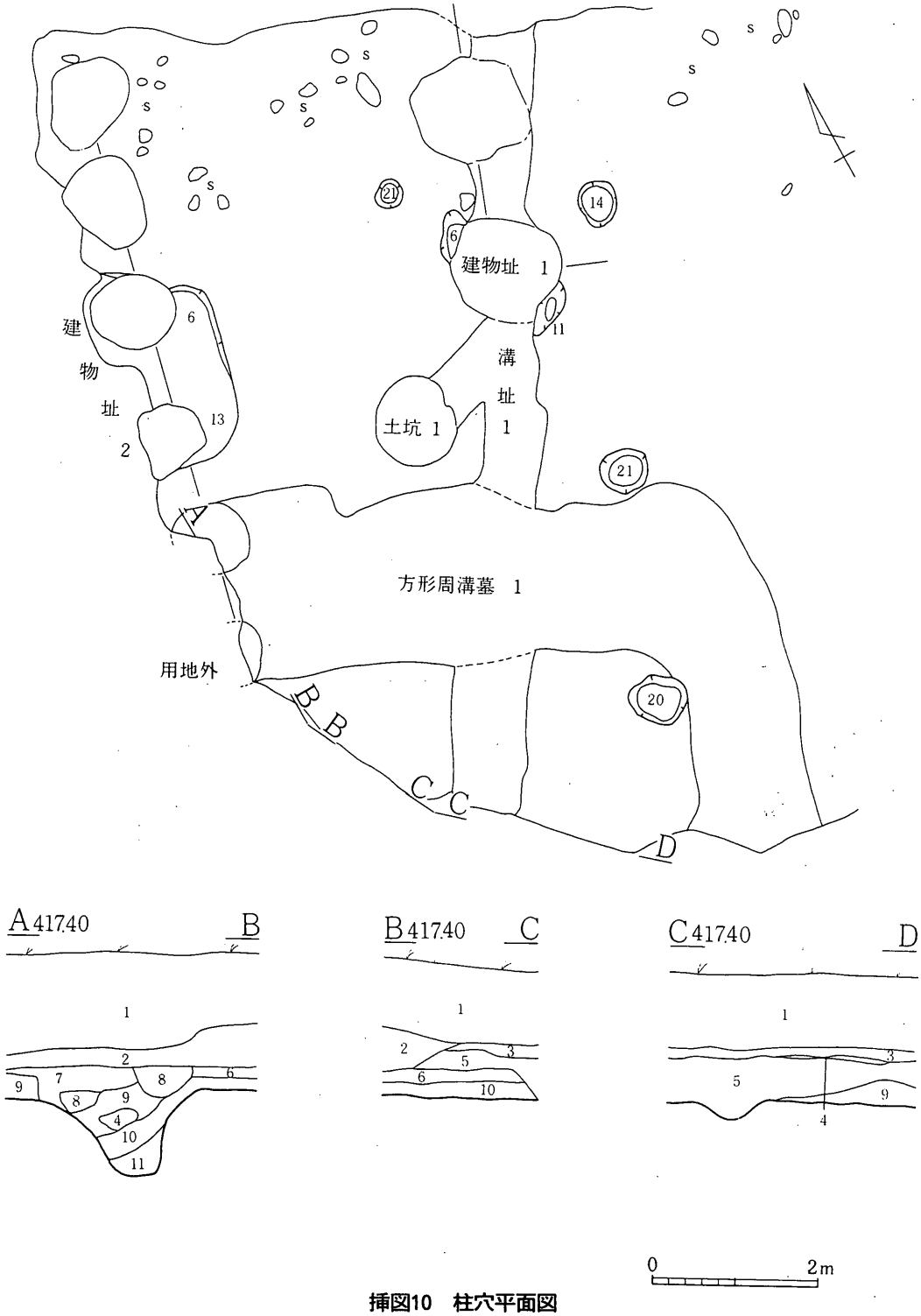


掘立柱建物址 2

挿図 8　掘立柱建物址 1・2


用地外
A
B
A416.00
B
建物址 1
C
D
C416.00
D
土坑 1
方形周溝墓 1
E
F
E416.00
F
用地外
溝址 1
A
B
C
D
2 号住
建物址 1
A416.00
B
C416.00
D
溝址 2
0
2m

挿図9　溝址1・2



挿図10　柱穴平面図

Ⅳ まとめ

今回の調査は，送電線の鉄塔予定地という狭い範囲に限られたもので，遺跡全体からみれば，そのごく一部に試掘坑をあげた程度のものといえる。その結果は本文中に記したとおりであり，今までは地表面において採集される遺物のみで推測されていた遺跡の実体により深く触れることができる調査であった。

調査前の本遺跡に対する認識としては，表面採集遺物及び地形条件等から弥生時代から平安時代にかけての一般的な集落址であろうとされていたが，新しく把握された事実がいくつかあり，それらを再度示し，また，それらから派生する問題点・研究課題等を整理し本書のまとめとしたい。

弥生時代

今回の調査により検出された該期遺構は，方形周溝墓１墓のみである。周辺の遺跡分布状況などから，弥生時代全般にわたる集落址の一画を成すと考えられていたが，調査面積の狭さもあり，わずかに後期に属する方形周溝墓の一部を検出するに止まった。

当地方の弥生時代後期集落相としては，住居域と墓域が近接もしくは重なり合った状況があり，本遺跡内に一定数の住居址が存在する可能性が高い。

また，本遺跡の立地する地形を見ると，小段丘崖に東西を区切られ，北端を頂点とする二等辺三角形状の段丘面上に展開した遺跡といえ，その北側部分が比較的乾燥する一帯であり，南側は上位段丘の崖下に発する湧水による湿地帯を形成する部分とに区別される。今回の調査地点は，段丘面上の北端部にあたり比較的乾燥する範囲内にあり，弥生時代以来の居住域を成し，南半の湿地帯を生産域とし，１つの段丘面上において，居住・生産・墓とにより構成された集落址の姿を推測することができる。ただ，それを具体的に証明するには，将来における周辺部における発掘調査を待つよりすべがないことも事実である。

古墳時代

松尾地区は，市内でも竜丘・座光寺と並んで多数の古墳が分布し，その時代にはかなり繁栄した土地であったといえる。

今回の調査においては，ごく限られた範囲であるにもかかわらず２軒の竪穴住居址が検出され，古墳築造の基盤となる集落の一画にあたると判断される。

また，周囲の古墳分布状況としては，本遺跡の立地する同一段丘面上に古墳の築造された姿を認めることはできないが，すぐ上位の段丘面上の調査地点から直線距離で約300ｍの位置に上溝天神塚古墳が，同じく約300ｍ東方の下位段丘面上に水佐代獅子塚古墳があり，それらの古墳築造に強く係わった集落であることはいうまでもない。

なお，今回の調査により検出された２軒の住居址は，その出土遺物の内容から，古墳時代でも最終段階に近いものと判断される。

奈良時代～平安時代

今回の調査地点，さらには本遺跡を最も特徴づける遺構として，２棟の掘立柱建物址がある。

２棟の建物址は，いずれも全体の一部分のみを確認したのみではあるが，その規模は一般集落にみられる小規模な建物址とは異なり柱掘り方のみ見てもその径が１ｍを越える大型のものであり，特殊な意味を持つ建物と判断される。また，２棟の建物址は，調査部分が棟方向の柱穴と梁方向の柱穴との差があり，建物規模も若干の大小があると推測されるが，２棟の棟方向はほぼ一致しており，２棟が同時存在した可能性が高い。

このように，大型の掘立柱建物址が複数検出された事実が何を物語るかの即断は困難ではあるが，古代官衙址に関連する何らかの施設が存在した可能性を強く指摘できる。

しかし，これらに直接関連する出土遺物の確認ができず，時代の特定ができないため，その具体的な性格の推論も慎重にならざるを得ないのも事実である。なお，出土遺物による詳細時期の特定は困難ではあるが，柱の掘り方そのものの検出面は，中世の遺物包含層よりは下部であり，古墳時代後期の竪穴住居址を切って構築されていることより，奈良時代から平安時代の間に存在した建物であるとの判断は可能である。

奈良時代もしくは平安時代の官衙址に関連した建物と考えたとき具体的にどのような性格づけが可能であるかは，調査範囲が狭小であり，出土遺物もなく，明らかには示し得ない。

当地方において，当該時期の官衙址としては，飯田市座光寺の恒川遺跡が奈良時代の伊那郡衙址と推測されている他は，類例がない。

仮に，今回検出された建物址が奈良時代に属すとすれば，古代伊那郡衙址の可能性は恒川遺跡と比較してみて，かなり低いといえる。それよりは，郡衙周辺の別の施設である可能性が高い。また，地形的な条件も，三角形の頂点状の位置にあり一定規模の範囲を確保することが困難であり，このことからも郡衙としての位置付けは困難といえる。それはまた，仮にこれらの建物が平安時代であったとしても同様である。

それでは，郡衙以外の官衙施設として，何にあたるのかを推論すると，伊那郡小村郷の郷庁もしくは，東山道育良駅のいずれかである。今回の調査結果のみでの判断は極めて困難であることはいうまでもないが，地形的な条件を勘案した時，後者によりその可能性が高いといえる。

東山道育良駅は，延喜式中の阿知と賢錐の駅の間に記載されているが，その位置を特定できない現状である。東山道そのものが飯田盆地のいずれを通過していたかも諸説あり，今だに伊那谷古代史研究上の大きな問題として位置づけられているわけである。

前時代の古墳時代における古墳分布の状況や，天竜川支流をより容易に渡河できる条件下にあり，郡衙所在地を推測される恒川遺跡もその経路上にある天竜川沿いの通過説を支持したとき，今回の調査地点を含む一帯に育良駅を求めると，きわめて合理的な説明が可能といえる。

本遺跡の所在する松尾地区の北端を，天竜川支流のうちでも有数の水量を持ち，かなりの急流である飯田松川が東流しており，これは，伊那谷南半にあって東山道の往来に最大の難所といえ

るものである。

この飯田松川を上流域で渡河しようとすれば，急流域をかなりの危険を犯して渡らなければならないばかりか，渡河地点に至る所で，右岸・左岸ともにこの松川の浸食による急峻な断崖を降登しなければならない。

一方，本遺跡の所在する天竜川との合流点付近は，その水量こそ変わらないが，川幅の広がりにより水深も浅く，水流の勢いもかなり緩やかになり，人・馬ともにその渡河を容易に果すことが可能といえる。

そのような状況の中で，本地点に育良駅があったことを推論することは，容認に値するといえる。

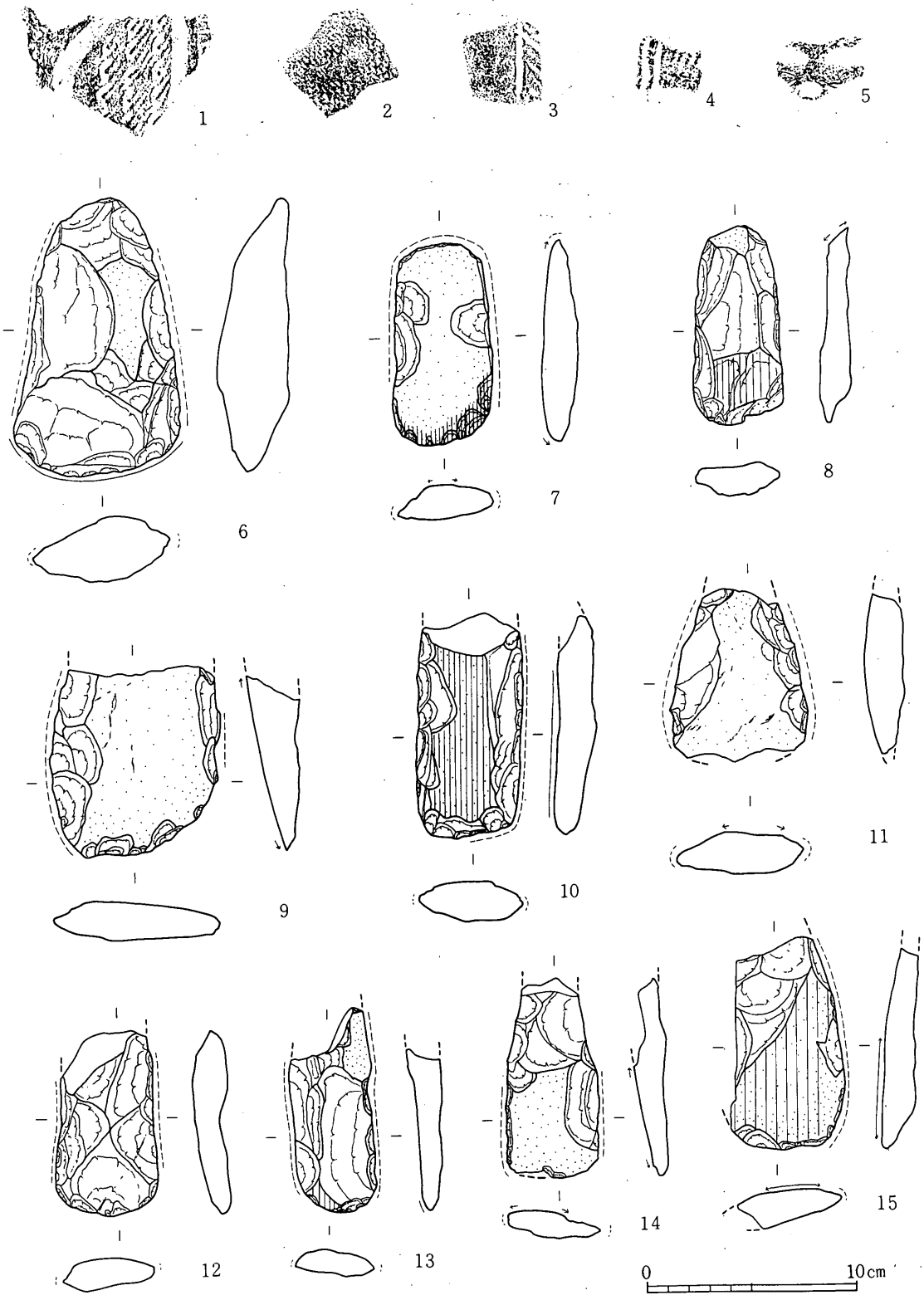
しかし，今回の調査は再三述べたように，極めて狭小な範囲の調査で，出土遺物にそれを裏付ける資料も皆無であり，あくまでも推測の域を出ないのも事実である。このことを具体的に証明するには周辺部分において，より広範囲にわたる調査実施がなされたときに自と明らかになるといえる。

以上，今回の調査に関して若干の整理をしてみたが，明らかにされた事実は，調査範囲のこともあり，ごくわずかといえるが，それらから提起された問題は，伊那谷の古代史解明上かなり重要であるといえる。

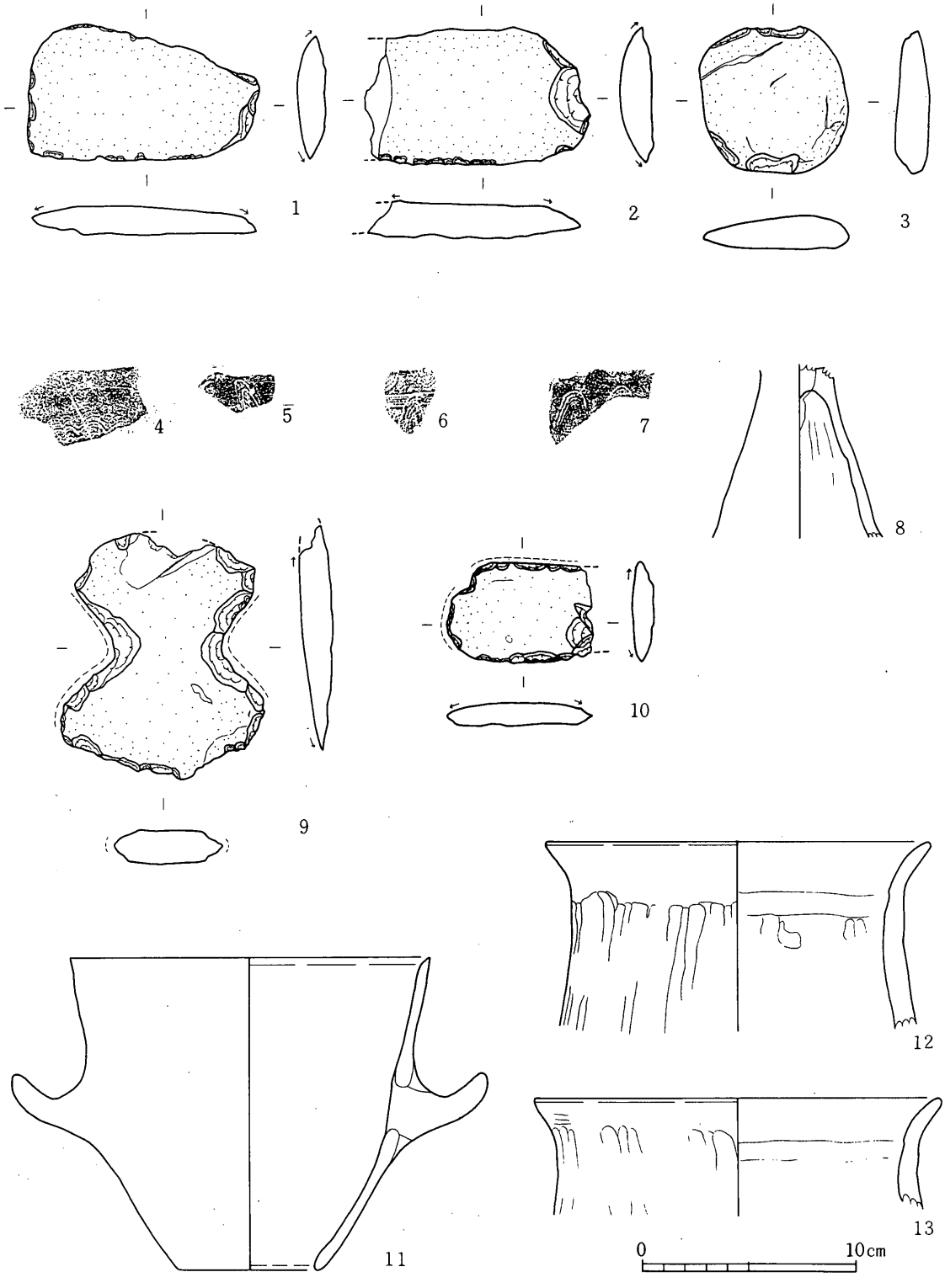
V　引用参考文献

飯田市教育委員会　1973『妙前大塚（3号）古墳』
飯田市教育委員会　1972・74『南の原遺跡』
飯田市教育委員会　1978『毛賀御射山遺跡』
飯田市教育委員会　1980『猿小場遺跡』
鼎町教育委員会　1983『矢高原・八幡原遺跡』
飯田市教育委員会　1988『八幡町古墳』整理中
下伊那史編纂委員会　1991『下伊那史　第1巻』
下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第2巻』
下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第3巻』
下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第4巻』
飯田市教育委員会　1986『恒川遺跡群』
鼎町史編纂委員会　1986『鼎町史』
飯田市教育委員会　1991『城遺跡』
飯田市教育委員会　1991『清水遺跡』
飯田市教育委員会　1992『八幡原遺跡』飯田バイパス
飯田市教育委員会　1992『八幡原遺跡』
飯田市教育委員会　1992『上溝天神塚古墳石室内清掃調査』整理中
飯田市教育委員会　1992『茶柄山古墳群』調査中
飯田市教育委員会　1992『物見塚古墳』

図　　版

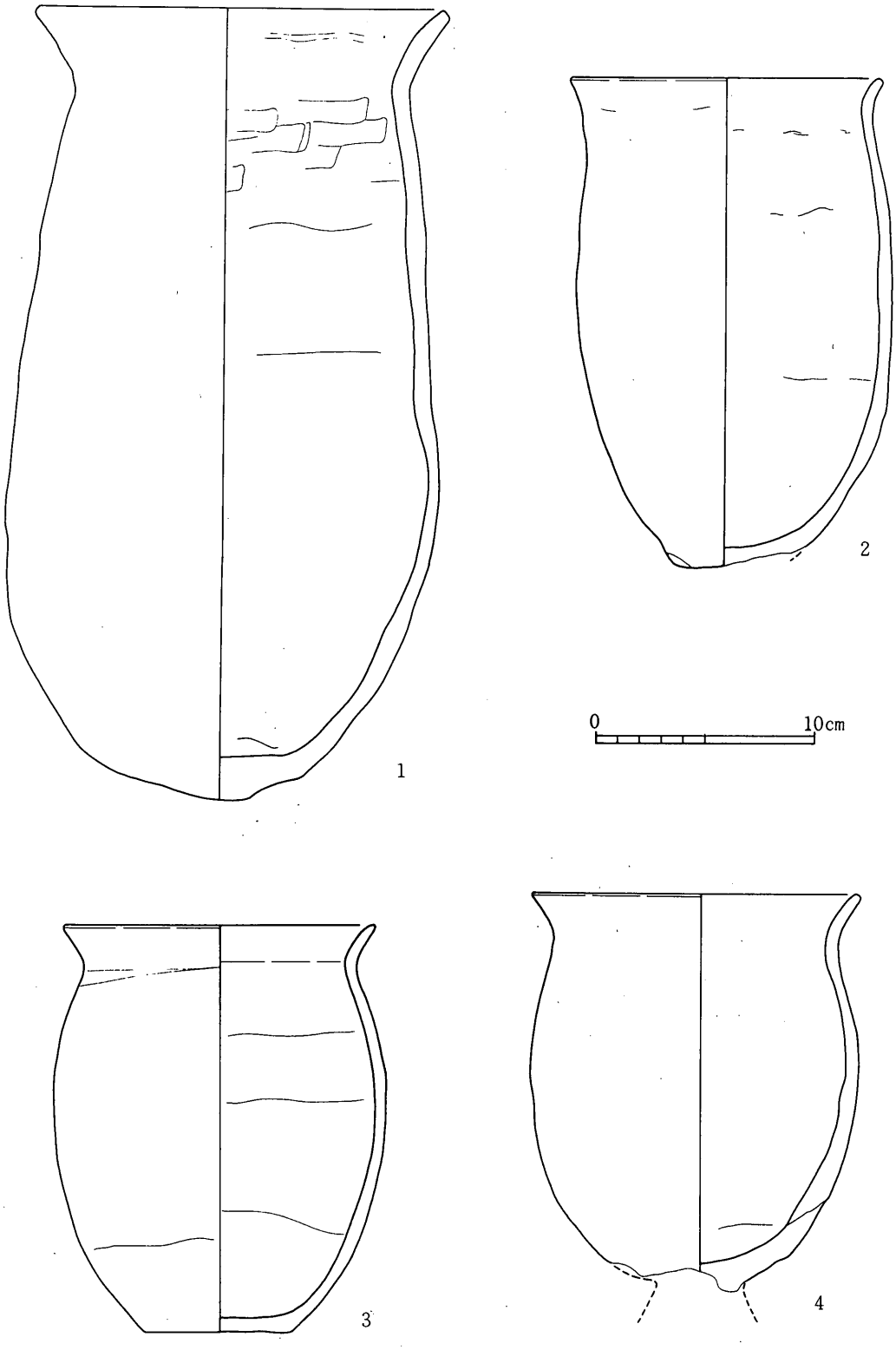


第1図　遺構外出土遺物（縄文時代）

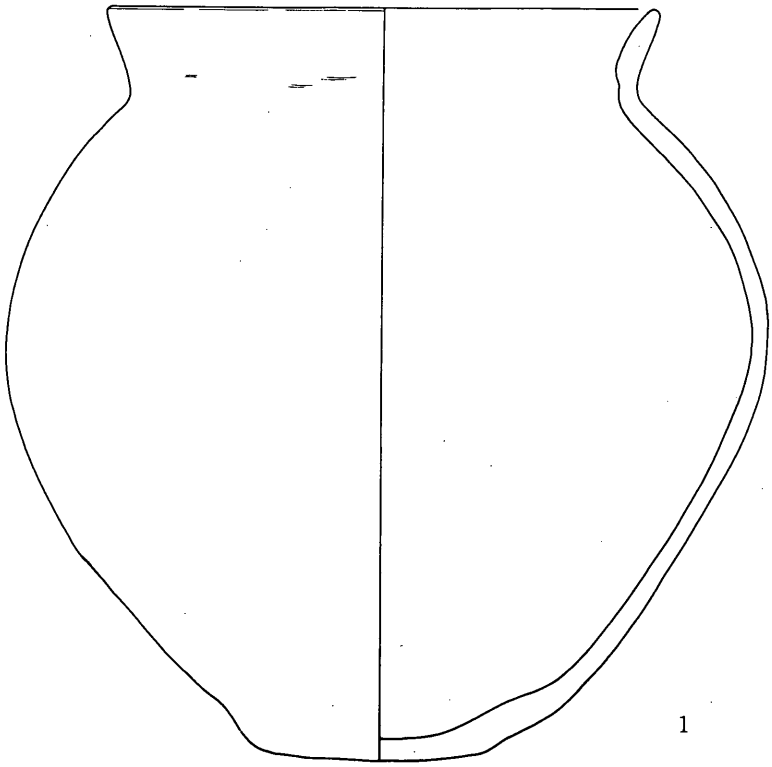


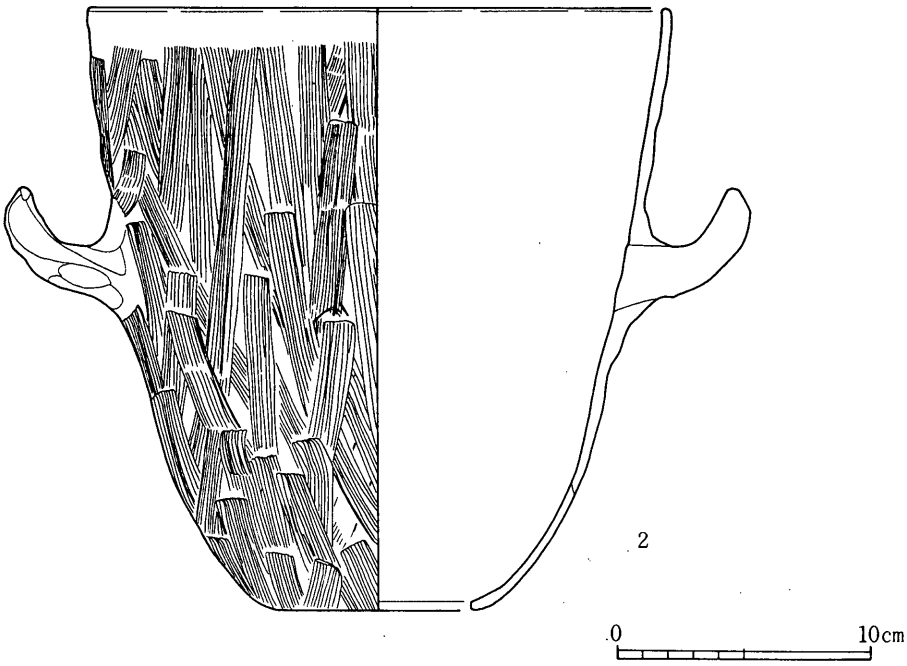
第2図　遺構外出土遺物（1～3，6～10）

縄文（1～3）弥生（4～10）古墳（11～13）

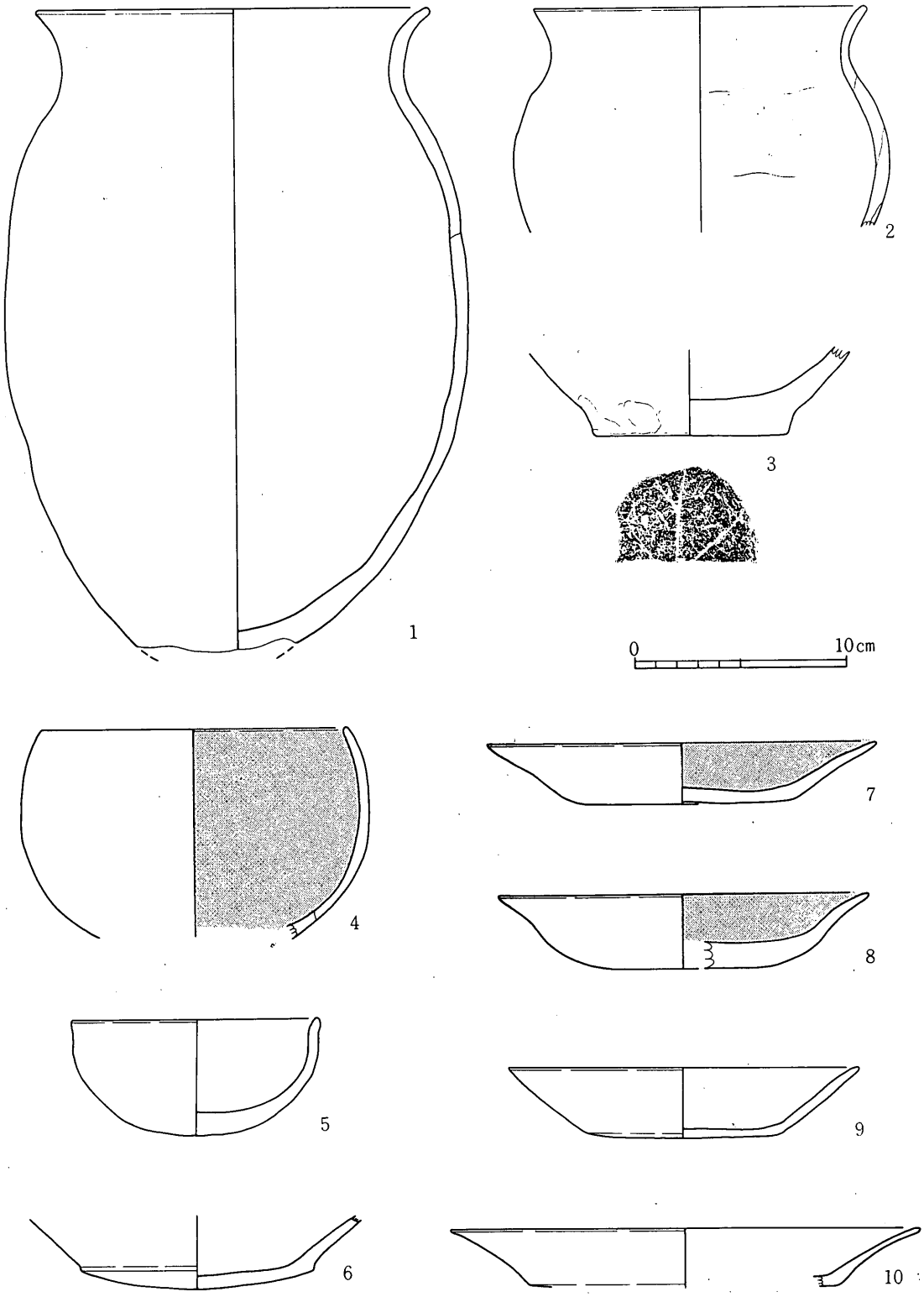


第3図　1号住居址出土遺物（1，2）
2号住居址出土遺物（3，4）（古墳時代）



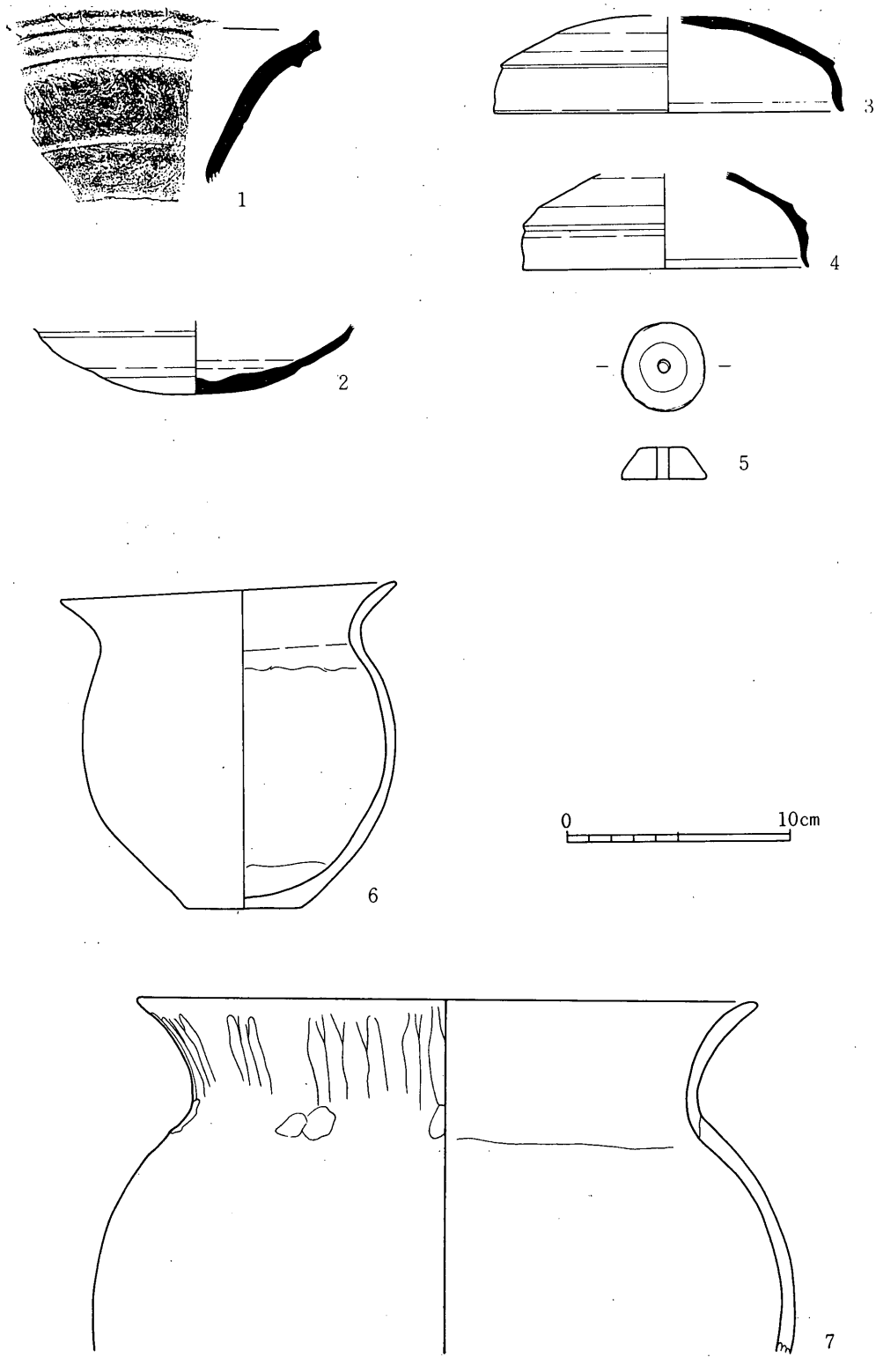


第4図　2号住居出土遺物（古墳時代）

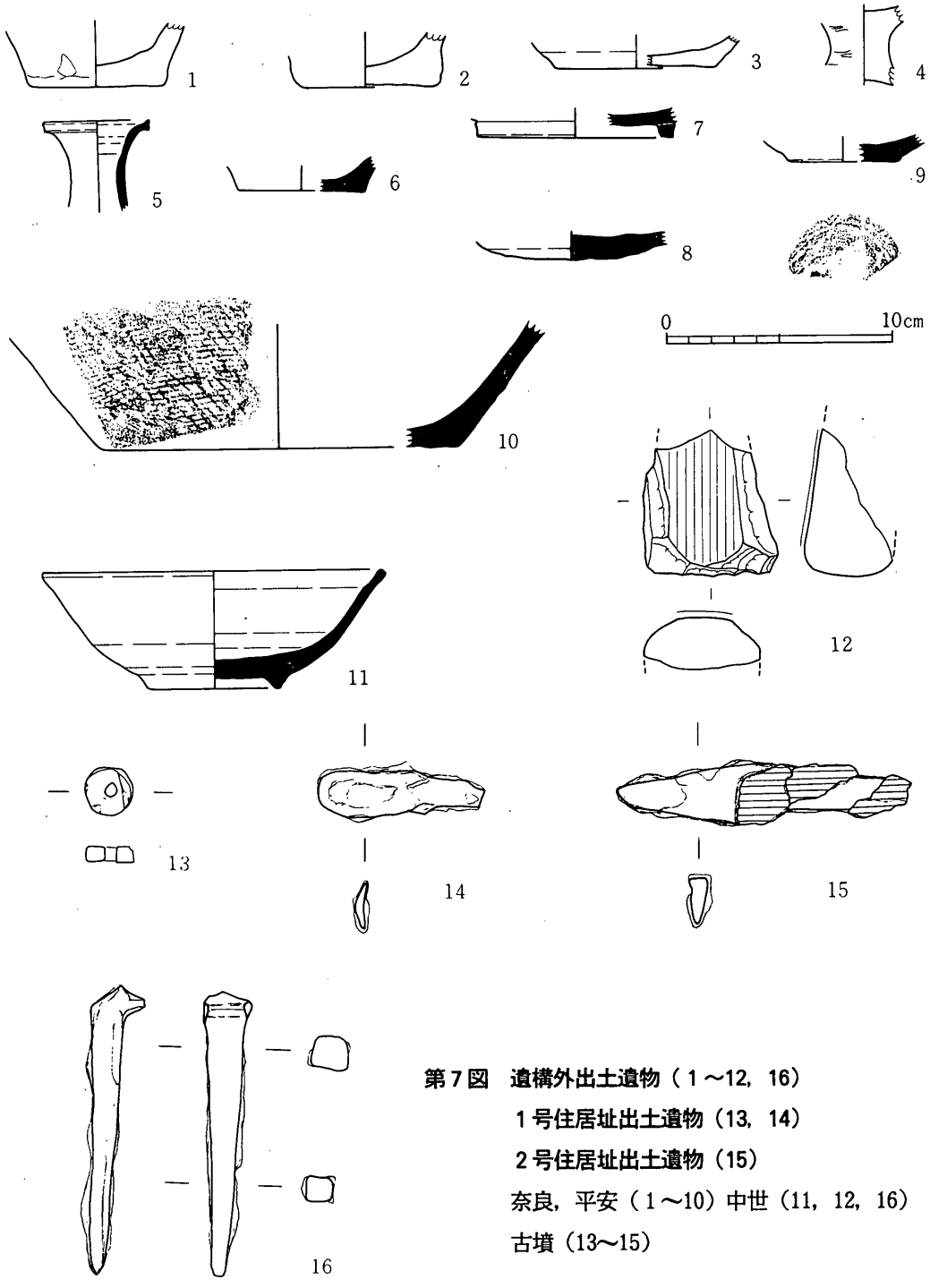


第5図　方形周溝墓1出土遺物（4，5）

2号住居址出土遺物（古墳時代）



第6図　2号住居址出土遺物（1～5）
遺構外出土遺物（6，7）（古墳時代）



第7図　遺構外出土遺物（1～12，16）
1号住居址出土遺物（13，14）
2号住居址出土遺物（15）
奈良，平安（1～10）中世（11，12，16）
古墳（13～15）

写 真 図 版

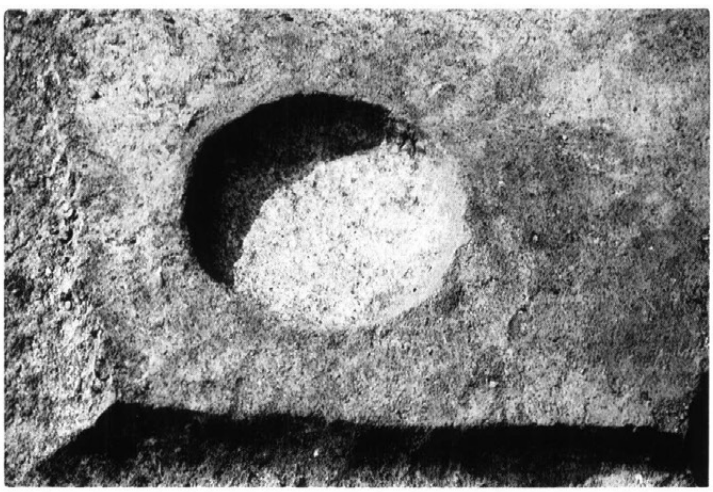
図版 1

久井遺跡　発掘調査区全景

図版 2

方形周溝墓 1

土坑 1　遺物出土状態



土坑 1（掘上がり）

1号住居址　全景

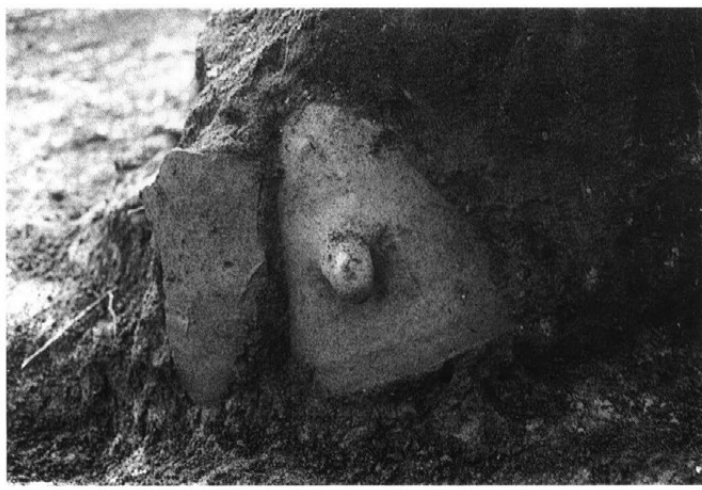
1号住居址　カマド址

1号住居址　遺物出土状態

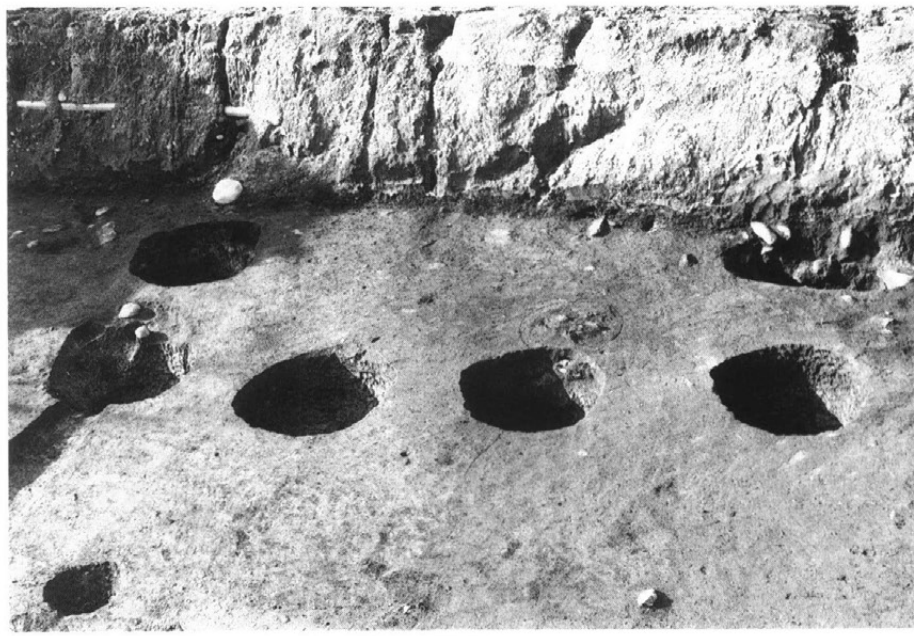
図版 4

2号住居址　全景

2号住居址　カマド



同カマド断面（甑）



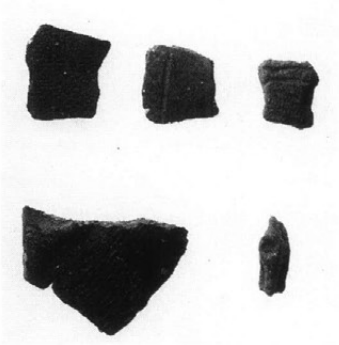
掘立柱建物址 1

掘立柱建物址 2

図版 6

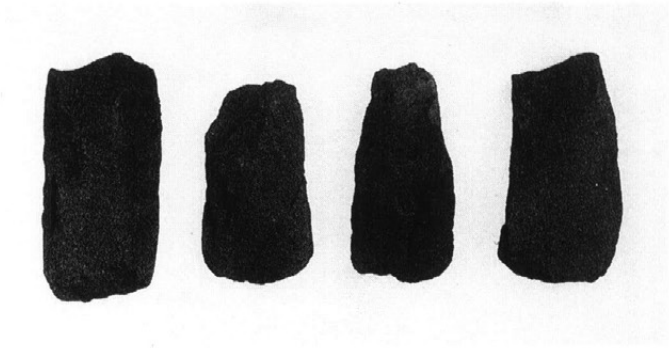
縄文時代遺物

遺物外出土

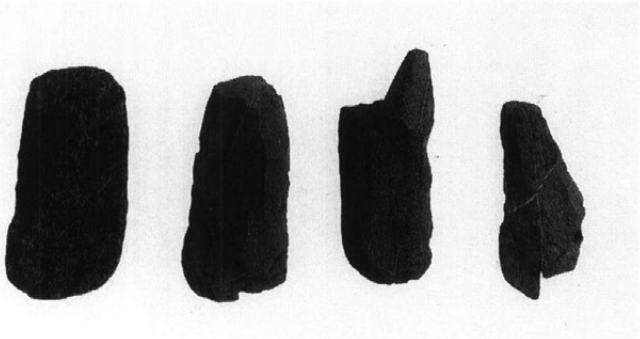


土器片

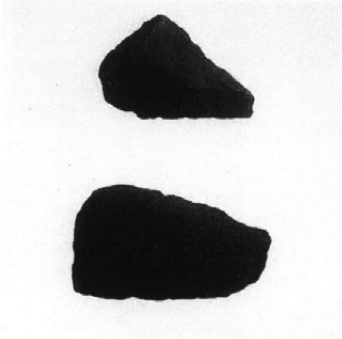
打製石斧



打製石斧（硬砂岩製）

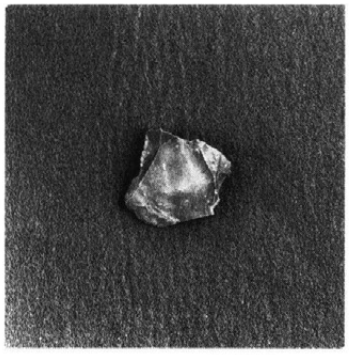


打製石斧（緑色岩）

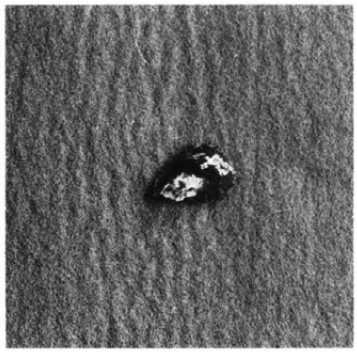


横刃形石器

石　錘



チャート（剥片）



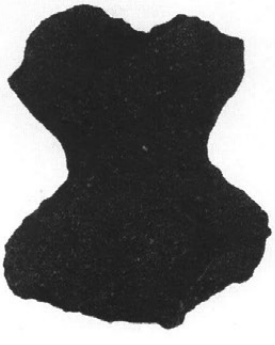
黒曜石（剥片）

弥生時代遺物

方形周溝墓 1 出土土器片

遺構外出土　土器片

同　高杯（丹塗り）



同　有肩扇状型石器

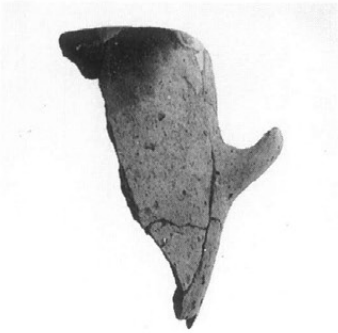
同　石包丁

図版 8

古墳時代遺物
その1
1号住居址出土
No. 1

長 胴 甕

長 胴 甕

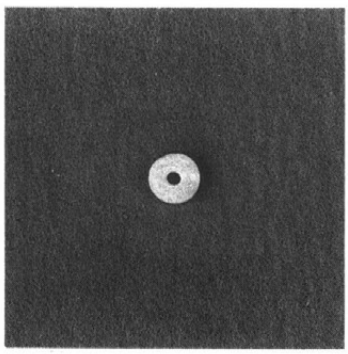


甑

同（胴部）

甕（口縁部）

坏



臼 玉

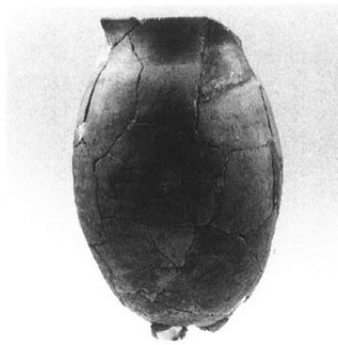
鉇（やりがんな）

古墳時代遺物
その2
2号住居址出土
No. 1

甕（胴部）

甕

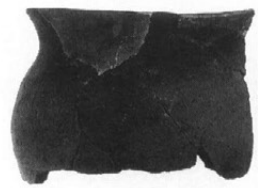
甕



長 胴 甕

甑

甕



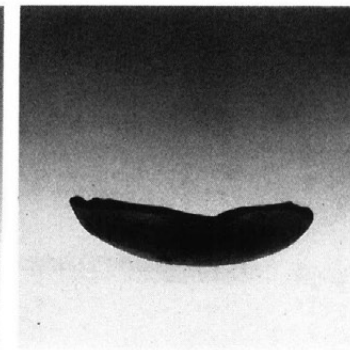
甕（口縁部）

甕（底部）

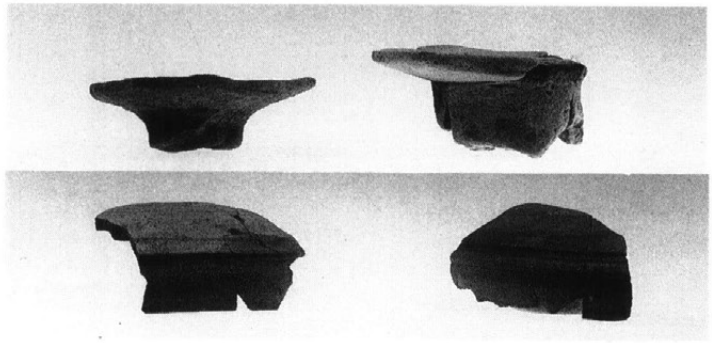
図版 10

古墳時代遺物
2号住居址出土
No. 2

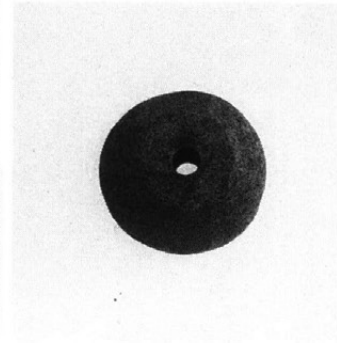
坏



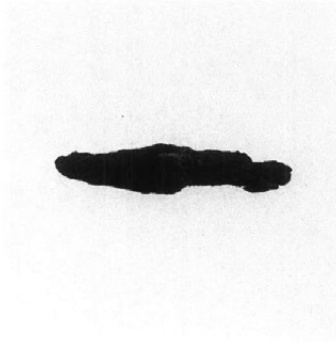
坏



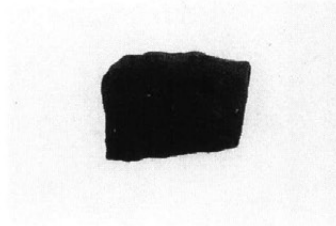
高坏（上段）　須恵器蓋（下段）



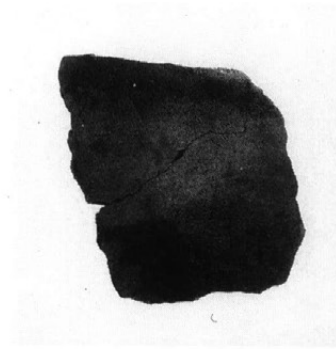
紡　錘　車



刀　子



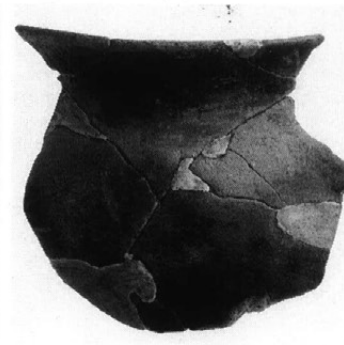
坏



甕

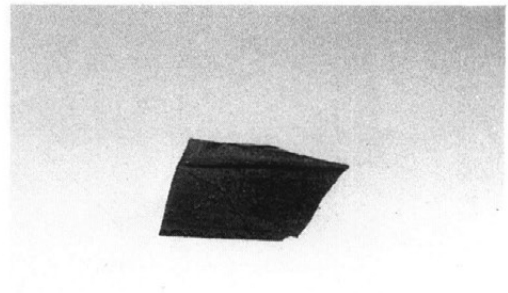
古墳時代遺物
その4
遺構外出土

甕



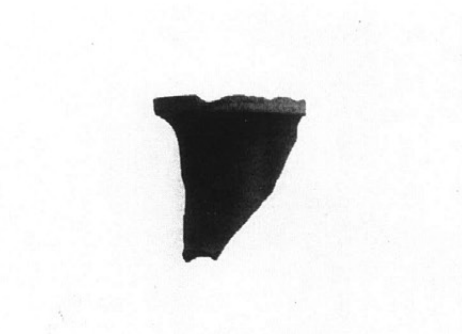
甕

奈良平安時代遺物
その1
掘立柱建物址2出土

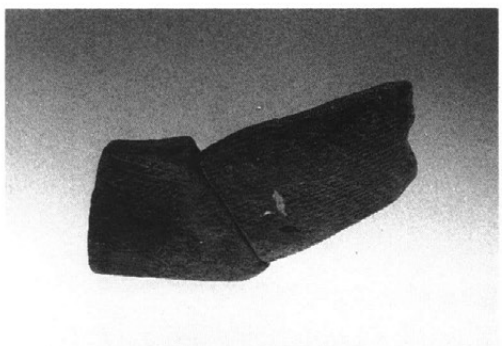


須恵器　蓋

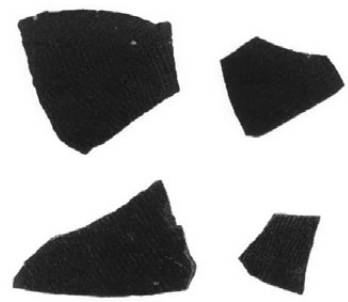
奈良平安時代遺物
遺構外出土



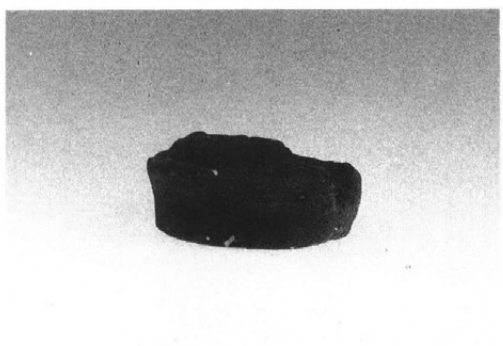
灰釉陶器　長脛壷



須恵器　壷（底部）



須恵器　甕（胴部）



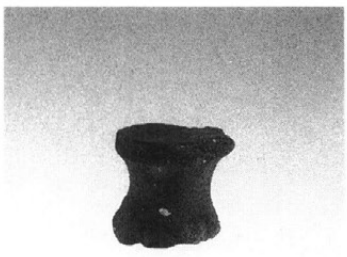
土師器　甕（底部）

図版 12

奈良平安時代遺物
その2
遺構外出土

須恵器　蓋

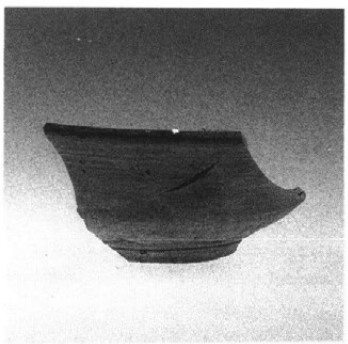
須恵器　坏（底部）



高坏（脛部）

ミニチュア土器

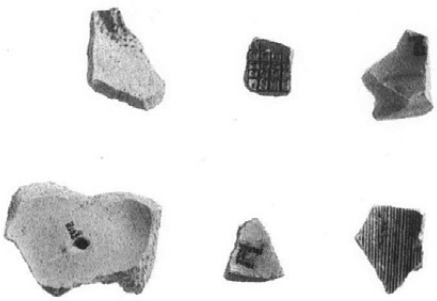
中世以降遺物
遺構外出土



山茶碗（中世）

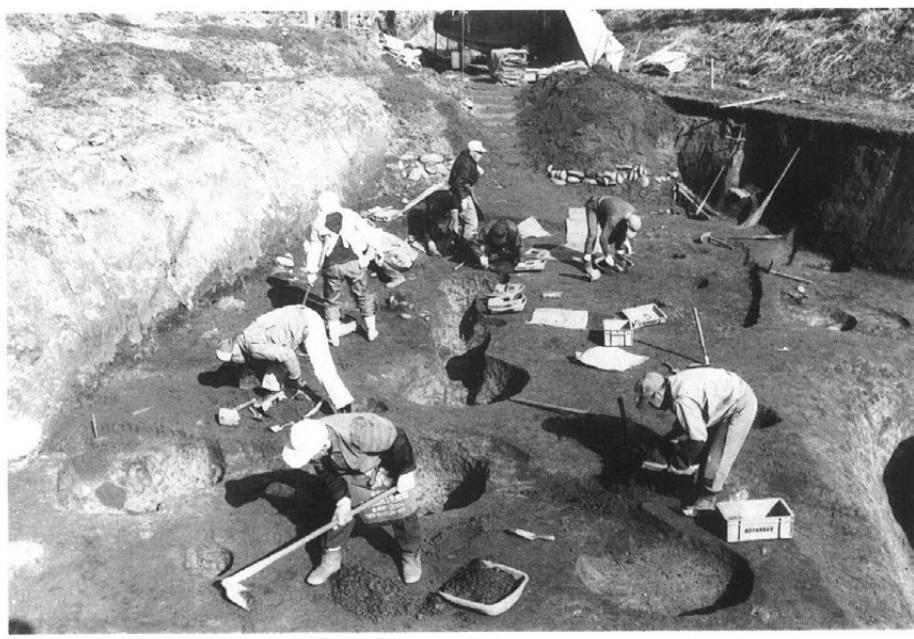
砥石（中世）

釘（近世）



陶磁器片（中世以降）

試掘トレンチ　掘下げ中



遺構　掘下げ中

久　井　遺　跡

―送電用鉄塔建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―

1993年３月　印刷
1993年３月　発行

編集・発行／長野県飯田市大久保町2534番地
長野県飯田市教育委員会

印　　刷／株式会社　秀　文　社